
THE ENDS OF THE LIFE

JOHNEY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE ENDS OF THE LIFE

【著者名】

JOHNEY

【あらすじ】

その世界には、「不死鳥」と呼ばれる世にも美しい鳥が存在するという。その生き血には「不老不死」の力があるとされ、人間は皆、その神秘の鳥を探し求めている。そもそも、不死鳥は本当に存在するのか？その生き血に宿るという力は本当なのか？それを知る者はいるのか？そして、老けることなく死ぬことのない命とは、幸福なのか？全ては疑問のまま。不死鳥の美しい姿に魅せられた少女が、強く・勇ましく・けな気に生きる。そして、少女が出会った一人の不思議な青年は、「不死鳥」に限りなく近い存在であった。

No.1 彼女の序章

毎間だといつのに、あまり明るくない湿氣た空から一枚の羽が舞いながら森の中に降下していく。

その色は淡い薄紅色で、光の加減によつてはオレンジ色にも金色にも見え、世にも奇妙な形をしてくる。

ゆっくりと静かに地へと落ち、その羽はまるで誰かを待つてゐるかのようにその場で落ち着いている。

突風が吹いても舞い上がらず、ずっとその場に静止している。

そこから少し離れた所を、ゆっくりと辺りを見回しながら歩く少女がいた。

何かを探してゐようだが、その足取りは軽い。

地面に無数に落ちてゐる葉や枝を踏むと、何とも秋らしく音色に出合つ。

その音を悠長に聞き入るわけでもなく、少女はせつせつと森の中を歩いていた。

先ほどまで足早に歩いていた少女は、突然何の前触れもなく立ち止まつた。

「これは……。」

そう言って少女が拾い上げたのは、淡い薄紅色の羽だった。

少女はゴクリと生睡を飲み込むと、その羽を片手に森を風の如く引き返して行つた。

商業都市コルサットの外れにある大きな洋館は、決して美しいものではない。

コルサットに住む者たちですら、その存在を良くは思っていない。

しかし、50年以上も前からその洋館は、陽の当たらない大きな土地に重々しく佇んでいる。

人々は言つ、「亡靈が住みついている」と。

そう、それは1年前の満月の夜に姿を現した。

その日に限つて、何年もの間空き家となつていたはずのその洋館の一室から、明かりがもれているのを、何人もの人間が確認した。

それは、洋館の一階の一一番右端にある部屋である。

住人も管理人も居ないその洋館に夜な夜な明かりが灯るのはおかしい。

きっと、何者かが忍び込んだのだろうと、コルサットの者たちは考えた。

しかし、洋館の頑丈な門や玄関に蓄積されたホコリは、きれいに積もつたままだつた。

それでも、光は確かに洋館の一室からもれている。

よくよく見れば、部屋の中で数人の影がチラチラと動いているのも確認できた。

それらは必然的に「亡靈」というものを連想させる要素が十分だつた。

その噂は瞬く間にコルサット中に広まつた。

それからも、亡靈が住み着いた洋館は奇妙な空気を漂わせながら、その腰を据えている。

毎間のコルサットは、賑わいに満ちている。

商業都市と言われるだけあって、街中には数多くの商店が軒を連ねている。

毎日が特売日のように全ての商品が安価で、それらを求めて遠方からわざわざのコルサットを訪れる者も少なくない。

コルサットは世界有数の商業都市の中でも、最も有名な商いの都なのである。

一日では、とても全ての物を見て回ることができないほど、大量の衣類や食料品、日用品などが立ち並ぶコルサットのメインストリートは、今日も騒がしいほど賑わっていた。

そんな商店街に見向きもせずに、街の外れに繋がる細い道を駆け抜ける少女がいた。

その手には、薄紅色の羽が握られている。

林に囲まれたその細い道を奥へ奥へと進んで行くと、徐々にコルサットの騒がしい民衆の声が聞こえなくなっていく。

道の先には、例の洋館が重々しい空気をかもし出して、少女を待つている。

しかし、少女は道をそれで、林の中へと入つていった。

林の中へ1メートル程入つた所で、少女は立ち止った。

辺りをキヨロキヨロと見回すと、その場にしゃがみ込み、地面に生い茂る草を掻き分け始めた。

すると、そこに鉄の突起が顔を出した。

少女はその突起を握り締めると、勢い良く上へと引つ張った。

そう、それは秘密の通路に繋がる秘密の入り口だつたのだ。

ポツカリと口を開けた1平方メートル四分の一に、少女は迷うことなく滑り込んだ。

少女によつて開けられた地面の扉は、自動的にゆっくりと静かに閉まつた。

薄暗い通路を、少女は再び走り始めた。

少女の靴が奏でる音が地下の通路の中で、奇妙に響き渡る。

通路を50メートル程進むと、銀色の鉄の扉がぼんやりと姿を現した。

その扉の取つ手の近くにあるテンキーのようなもので、少女は素早く何かのコードを入力した。

すると、鉄の扉はゆっくりと手前に開いた。

そして、少女が中へ入ると、自動的にゆっくりと閉まった。

鉄の扉の先は、無数のライトと数え切れない程のコンピュータに囲まれた世界だつた。

白衣を身に着けた複数の男と、パソコンに向かう4人の男女が、鉄の扉が閉まるのと同時に少女の方を一斉に向いた。

「どこへ行つていた。」

白衣の男が少女に訊ねた。

「森よ。」

少女が無表情で答えた。

すると、白衣の男は足音も立てずに少女の前に歩み寄つた。

「無断で外へ出るなど言つておいたはずだ。」

白衣の男の口調には、力強さはあるが心がない。

少女は表情をしかめ、

「私の勝手でしょ。」

と白衣の男をにらみ付け、わざと肩をぶつけて男の隣をすれ違つた。

その部屋の奥に、もう一つ鉄の扉がある。

その扉の脇にもテンキーがついていた。

少女は再び手馴れた素振りでコードを入力し、開いた扉の向こうに姿を消した。

扉の先は、薄暗い石の階段が不気味に上へと伸びている。

少女は、ゆっくりとその階段を上り、その先にある木製の扉を開けた。

扉を開けると同時に少女は森で拾つた羽を胸のポケットにわざと立つように差し込んだ。

少女が開けた扉の先は、洋風のインテリアが並ぶ広い廊下だった。

その廊下の窓の外にはコルサットの夜景がきらびやかに映つている。

少女は先ほどとは打つて変わって、その口元に微笑を浮かべながら、その廊下を歩き出した。

その間に数人、少女とすれ違つた。

その全ての者が、少女を見て驚愕の表情を浮かべて少女を凝視する。

それを見て、少女は誇らしげな笑みを浮かべ、しかし、どこか冷た

そのある態度で彼らの横を通り過ぎて行く。

少女は、その廊下の一一番端にある一室の前で立ち止まつた。

その扉のノブに手を伸ばし、ビビりか緊張したような素振りで戸を開いた。

「失礼します。」

少女の声が部屋の中に響いた。

「誰かね？入室を許可した覚えはないが……。」

部屋の中にいた中年の男が少女の声に応えた。

「緊急の用がござりまして、失礼を承知で参りました。」

少女は軽く会釈をする。

中年の男は、会釈をして下げる頭を少しづつ上げた少女の左胸に光る、薄紅色の羽を見た。

「わ、それは、まさか……！？」

「お気づきですか？」

少女が不敵な笑みを浮かべながら、中年の男のそばに歩み寄つた。

中年の男の表情は、どこか硬い。

少女は胸に挿していた羽を手に取ると、それをヒラヒラと躍らせた。

「チーフもご存知の通り、これはかの有名な「不死鳥」の羽。
この「ロングシャドウ」の研究員が必死に探し求めている代物です。
私はこれを一研究員として、この場に持つてきただけでは、ありません。」

少女の瞳には、どこか鋭さがある。

少女の頭の中では、過去の苦い出来事がグルグルと甦り、駆け巡っていた。

それは、今からさかのぼること、半年前。

それは、突然起きた。

少女は「不死鳥研究団体ロングシャドウ」内で最も有力な人材として有名だった。

将来、幹部候補でもあった。

しかし、それはその日に崩れた。

少女は、不死鳥の研究に没頭する毎日を送っていた。

少女にとつて不死鳥は、憧れそのものなのだ。

紅の大きな羽を羽ばたかせ、大空を自由に舞づ、その姿を一目見た
いという一心で、少女は日々不死鳥の行方を追っていた。

その姿が確認されることはマレで、存在しているかどうかさえ、未確認である。

しかし、少女は不死鳥の存在を純粋に信じていた。

なんの根拠もないが、少女はいつか必ずその姿を見ると、心に強く誓っていた。

多くの不死鳥研究家は、その不死鳥の能力に魅せられている。

不死鳥は、その名の通り死なない鳥。

永遠の命を司る、人類の憧れの象徴なのである。

また、不死鳥のその鮮血を浴びることによって、不老の能力を得ることができると伝えられている。

つまり、不死鳥の鮮血が手に入れば、不老不死の身体になることができるということなのだ。

そのため、ほとんどの不死鳥研究家たちは、邪まな欲望にかられ、血眼になつて不死鳥を搜索している。

少女は、実家で父親と2人で細々と暮らしていた。

けして裕福な家庭とは言えないが、2人は素朴で幸せな毎日を過ごしていた。

少女が幼い頃から父親は朝から働きに出ていたため、少女はいつも独り、家で留守番をしていた。

その父親が居ない寂しい家の中で、少女はいつも不死鳥に関する文献を読みあさっていた。

少女は、不死鳥の限りない能力よりも、その姿形の美しさに魅了された。

いつか、必ずこの目で見よう。少女は、そう決心をした。

決心を固めてからの少女の行動は早く、不死鳥研究団体ロングシャドウの存在を聞きつけると、迷わず入団をした。

それが、少女の不運の始まりだったのかもしれない。

少女がロングシャドウに入つてから数週間後、少女は早くもロングシャドウ内で1、2を争うほどの、研究家へと成長した。

その、不死鳥に関しての知識の豊富さや、危険な場所へも臆せず赴く度胸や、運動神経の良さが、他の研究員の上をいつていたのだ。

それによつて、周囲の研究員から妬まれるようになつていった。

そんなある日、少女は研究所内であらぬ濡れ衣をさせられる。

研究に使つていた不死鳥の貴重な文献を、彼女が盗み出し焼失させたというのだ。

そんなことを、少女がするわけがなかつた。

少女にとって、不死鳥の文献は何より大切な物。

そんな物を盗み出し、しかも燃やすなどといふことが、少女にできたであろうつか。

少女は、そんなモラルの低い人間ではなかつた。

しかし、田ごろから少女を妬む人間は数多くいて、濡れ衣を着せられて困つてゐる彼女を見ても、誰も助けようとはしなかつた。

さらに、少女の罪を立証するべく、ロングシャドウの研究員たちは、彼女の唯一の肉親である父親を連れてきて、乱暴に拷問した。

「娘は、そんなことをする人間ではない。何かの間違いだ。」

父親は、どんなに傷めつけられても、その言葉だけは絶対に曲げなかつた。

そして、少女の濡れ衣が晴れる前に、少女の父親は拷問によつて昏睡状態となり、命はあつても意識を一向に取り戻さない植物人間となつてしまつた。

それから数日後に、真犯人が自白し、少女の濡れ衣は見事に晴れた。

しかし、少女の心中には、掛け替えのない人をひどいめにあわされたということへの怒りが大きく、濡れ衣が晴れても何も嬉しく思えなかつた。

もう、ロングシャドウを抜けよう。

少女は、そう考えた。

しかし、それではロングシャドウへの怒りを消す手段が失われてしまつ。

少女は、その時にロングシャドウへの復讐を思い立ち、必ずロングシャドウを破滅に追い込んでやると、心中に誓つたのだった。

そして、それから半年後の今日。

少女は、ロングシャドウへの復讐劇の幕を上げるべく、薄紅色の羽を掲げて立つていた。

「もつ、私はあなたたちのためなんかに、不死鳥の研究をする気はありません。」

少女の言葉に、先ほど少女からチーフと呼ばれた中年の男が慌てて答える。

「それは、困る! キミが今ロングシャドウのために動いてくれなくなると、研究に支障をきたす。」

「キミの存在は、ロングシャドウにとって實に多大なんだ。」

その言葉を聞いて、少女はほくそ笑む。

「だから、私はロングシャドウを脱退するんです。あなたたちは、私がいないと何もできないからね。」

やつ血ひで、少女は部屋を堂々とした足取りで立ち去った。

少女はこの半年間、死に物狂いで働いた。

ロングシャドウに利益になるように、必死で研究をし続けた。

その結果、ロングシャドウは少女なしでは研究をできない、雑魚団体へと変化した。

それを、少女は狙っていたのだ。

それは、少女のけな氣な復讐の序章だった。

少女は、未だ意識を取り戻さずに眠り続けている父を前にして、心の内を囁いた。

「父さん…。私、ロングシャドウを脱退したよ。

これが、私のできる限りの復讐なの…。

これから先、もつともつと頑張つて不死鳥の研究を進めていくて、ロングシャドウの奴らをギャフンと言わせてやるんだ。

だから父さん、私のこと、見守っていてね…。」

少女は、父親の手を強く握り締めた。

しかし、ベッドで横たわる父親に反応はない。

少女は父親の傍らで、いつの間にか寝入ってしまった。

その胸元には、まだ先ほどの薄紅色の羽が光っていた。

No.1 彼女の序章（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。この作品は、あまり完成度は高くありません（汗）むしろ、至らぬ点をこ指摘いただけただけでも、喜ばしいことかと思っております。もしよろしかつたら、今後もお読み頂けたら、幸いでござります。では、失礼いたします。

ゴルサットから少し離れた所にテグスターという小さな町があり、そこは町のほぼ全域が繁華街になつてゐるためガラの悪い人間が多く、酔っ払い同士や裏社会の人間同士などのイザコザがよく巻き起こつていた。

町が最も賑やかになる夕方を迎へ、テグスターは活気に溢れた夜の町へと変貌していた。

そんなテグスターの騒がしい道を、10代後半ぐらいの青年が酒を片手に歩いていた。

その顔立ちは整つていて、赤茶色の髪を持ち、瞳の色は光が当たると綺麗な紅色に輝いた。

女たちが次々に彼の方を振り返る。

しかし、青年はそんな目を氣にも止めず、一直線に目的地を指していた。

青年は、とあるレストランに足を踏み入れた。

レストランの戸を開けると、中から「いらっしゃいませ」という元気の良い声が聞こえてくる。

青年は、レストランのカウンターの横にある階段を下りて、地下へ

と消えて行った。

「どうやうが、そこの店の従業員は皆、彼を知つてゐるようだ。
その証拠に、地下に消えた青年を気に掛ける者は、誰一人としてい
ない。

青年は、薄暗い階段をゆづくじと物静かに下つて行く。

それは、まるで気配を消しているようだ。

青年は地下に辿り着くと、手探りで電気のスイッチを探した。

そして、パチッといつ音と共に、辺りは明るくなつた。

すると、青年の田の前には銃を構えた男がいることが分かつた。

その男は、青年の方に銃口を向けて、やや震えた様子でいる。

「あんたが、ブルースカイのリーダー？」

と、青年は、落ち着いた面持ちで銃を構える男に訊ねた。

「ああ、そうだよ！お前は、例の殺し屋だろ？」「
俺を殺しに来た、噂の死神だろ？」

その男が、震える声で叫んだ。

すると、青年は「コッ」と笑つた。

「死神？俺つて、陰じゃあ、そんな風に呼ばれてるんだ。」

青年は丈の長いコートを羽織っていた。

そして、おもむろにそのコートを少しだめくつた。

そのまま、やや姿勢を落とし、両拳を胸の前で構える。

それを見て、銃を持つて居る男が怯え始める。

「や、やめろ！…俺は、死にたくない…！」

男は、そう叫んだ瞬間に勢いで銃の引き金を引いた。

バーンッ！…！…といつて凄まじい銃声が地下内に響き渡った。

弾丸は、青年の胸を見事に貫通していった。

しかし、青年は倒れる事なく、その場に立っている。

苦しそうな様子もない。

「残念でした。」

そうつぶつと、青年は近くにあつた棒を手に取ると、男の首を後ろから強く殴打し、その首の骨を折つて立ち去つた。

去り際に、青年は手に持つて居た酒をぐつたりと倒れている男の傍らに置いて行つた。

青年は階段を上って、再びレストランに現れた。

すると、カウンター越しに1人の美女が青年に話し掛ける。

「カイ。『苦勞様。』

「銃声、聞こえちゃった？」

美女にカイと呼ばれた青年が、頭をポリポリとかきながら言った。

「大丈夫よ。誰も気にしてないから。」

美女は、そう言ってカイにドリンクを手渡した。

それは酒ではなく、グレープフルーツジュースだった。

「サンキュー、ミキカ。」

そう言って、カイはグレープフルーツジュースを一気に飲み干した。

そして、カイはカウンターに腰掛けた。

その隣に、カイにミキカと呼ばれた美女が静かに腰掛けた。

「ねえ、カイ。本当にこの仕事辞めるつもりなの？辞めて、一体どうするつもり？」

「もう、辞めるって決めたんだ。今さらだけど、やっぱり人の命を奪うのは、良くないよ。

俺も、ようやくそう思えるようになったわけ。

それに、これからは本格的に不死鳥の行方を捜すつもりだから、本
氣で旅にでるよ。」

カイは、やわらかな笑みを浮かべ、頬杖をつきながら言った。

「不死鳥を追つて、どうするの？前からカイって不死鳥に興味持つ
てる感じしたけど、不老不死の伝説なんて信じてるわけじゃないわ
よね？」

ミキカが、馬鹿にしたような口調で言った。

すると、カイはミキカの瞳を見つめて、

「呪いを解く。」

と、一言残すと、カイはレストランを足早に立ち去った。

ミキカは、意味不明だと言わんばかりの表情で、カイを見送った。

No.2 紅い青年（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。第一話の後書きをさせていただきました。何かお気づきの点など、ございましたら、是非ご意見等お聞かせ願いたいです。今後もよろしくお願い致します。では、失礼致します。

少女が目を覚ましたのは、月が空に現れた夜更けだった。

少女は窓の外をふと見た。

すると、コルサットの外れにある洋館の方に向かつて歩く、1人の男を目撃した。

少女は不審に思い、その男の後を追つた。

男は、洋館の前に辿り着くと、中を一心不乱に覗き込んでいる。

噂の洋館を見に来る人間は少なくないが、こんな夜更けに、しかも異様に興味津々な様子が一層怪しかった。少女は意を決して男に話し掛ける。

「あの……。」

その少女の声に、男は驚く様子は見せず、かえつて喜んでいる様子がある。

「コルサットに住んでる人?」

男は、少女に訊ねた。

男は、不思議な瞳の色ではあるが、その端整な顔立ちには少女も目を奪われた。

「はい、やつですけど……。……」
「何してるんですか……？」

少女が、不審者を見る目で男を見つめながら言った。すると男は、

「「」の洋館って、もう誰も住んでないんだよね？」

夜の空氣の中に不気味に浮かび上がる洋館を、見つめながら言った。

「今夜一晩だけでも、使わせてくれないかなあ？」と思つてさ。」

男は、頭をガシガシとかきながら言った。その容貌には似合わない仕草だった。

「宿を探してるんですか？」

少女が訊ねた。すると、男は目を輝かせた。

「俺に宿、提供してくれんの？」

男は少女に近寄った。そして、満遍の笑みで、

「金は、ないよ。全部、飲み食いで使いきつちまつたから。」

と、少し悪びれる様子を見せながら言った。

少女は、そんな男と関わったことを後悔しつつも、悪人ではなさそうなその男に、一泊の宿を「貸える」とこした。

少女は男を自分の家に案内した。

けして大きな家ではないが、父親の部屋と自分の部屋以外に、空いてる部屋が一つあったのだ。

そこを、男に今夜一晩だけ貸すこととした。

「いい、あんまり広くないけど……。使ってください、野宿よりはマシでしょ?」

やつ置いて、少女は男を部屋に案内して立ち去りつとした。すると、

「ああ、あのやあ。」

男が少女を呼び止めた。

「何ですか?」

少女が面倒くさそうに男の方を振り返った。

「まだお互い、自己紹介してなかつたよな。俺の名前はカイ。キミは?」

「私はサガミです。」

サガミは冴えない顔をして答えた。

しかし、カイは全く気にしていない。

一瞬の沈黙の後、

「ああ、そうだ。一つ訊いていいかな？」

「はい。」

サガミは、ため息まじりに答えた。

「不死鳥って知ってるかな？」

と、カイが訊ねた。

すると少女は、不死鳥という言葉を聞いて表情を一変させる。

「あなたもしかして、不死鳥を追つてるの！？」
「じゃあ、私と一緒になのね。何か、耳寄りな情報を持つてたりするの？」

サガミの表情は先ほどまでとは打つて変わって、輝いていた。

カイも、そんなサガミの態度の変化に気が付いていないわけではないが、あえて問う気もなかつた。

「耳寄りな情報を持つてたら、コルサットなんかに来たりしねえよ。
まだまだ、俺の不死鳥探しは手探り段階なんだよ。キミは、不死鳥には詳しいの？」

そのカイの言葉を聞いて、サガミは明らかにガツカリとした表情を浮かべた。

「あなたよりは詳しいかもしない。」

「じゃあ、不死鳥を陰で徹底的に研究してるっていう、変な研究団体知ってる？名前は確か、……ロングシャドウって言つたかなあ？」

「よく知ってる。つい最近まで、ロングシャドウで研究員やってたから。」

そのサガミの言葉に、カイは驚いた様子を垣間見せながらも、ビニカ喜んでこうの様にも見える。そして、

「元研究員だつたんだ？じゃあ、不死鳥に関しては知らない」とはないぐらい、詳しいわけだ？」

と、カイが腕を組みながら言つた。するとサガミは、

「知らないことなんて、たくさんあるわよ。」

少しムツとしたような様子でいる。

「例えば？」

と言つて、カイは立つたままの姿勢で、窓際にもたれかかった。

「例えば？……、そうねえ、……例えば、不死鳥の寝床とか……。」

「寝床？俺、知ってるよ。不死鳥が、過去に寝床にしてた場所だつたらだけど。」

と、カイが何食わぬ顔でサラリと言つた。

サガミはカイに、食い掛かるよつた勢いで問う。

「本気で、言つてんの?」冗談だつたら、怒るわよ。」

「ああ、本気だよ。不死鳥は、一度見たことがあるし。」

カイは、またもやそのような事をサラリと言い放つた。

サガミはかえつて、不信感を抱いた。

「本当に……?」

疑いの眼差しで見つめてくるサガミに、カイは笑顔で応える。

「宿を与えてくれたお礼に、不死鳥の過去の寝床と、俺が知つてゐる限りの不死鳥の情報、キミに教えるよ。それだけじゃ、不服かもしないけどね。」

男前のカイに満遍の笑みで言われて、サガミは思わずボーッとしてしまつた。

「今すぐ教えて。不死鳥の寝床。」

「お安い御用です。」

そう言つてカイは、サガミから借りた部屋にある小さなテーブルに、懐から取り出した大きな世界地図を広げた。

「ijeが、コルサット。」

カイがそう言つて指差したのは、世界地図のコルサットと記された

場所だった。

サガミは真剣な眼差しで、世界地図とカイの指を見つめている。

「大陸は大きく4つに分かれていて、シュンオウ大陸、カイオウ大陸、コウオウ大陸、トウオウ大陸って名前のは勿論、知ってるよな？ちなみに、コルサットはシュンオウ大陸にある。そして、俺が不死鳥と会った場所は、ここ、ライクっていう国の深い森の中だ。」

そう言って、カイはカイオウ大陸にあるライクという国を指差して言った。

「つまり、そこが不死鳥が過去に寝床にしていた場所ってこと？」

サガミが、カイの方を見て訊ねた。

「そう。不死鳥って、3年に1度の周期で寝床を変えてるのは知ってるよね？」

サガミは頷いた。

「俺が会った時期から計算していくと、ちょうど今年寝床を変えることが分かったんだ。」

「じゃあ、空を飛ぶ不死鳥を、もしかしたら田撃できるかも知れないってことー？」

サガミの表情は、今まで以上に輝いている。

「まあ、うまくいけばね。それに、一度寝床に使った場所を一度と

寝床には使わないって、わけじゃないみたいだし、運が良ければライクの森の中で遭遇できるかもよ。」

「でもまさか、『ごく最近に使つてた寝床を、今回また使おうなんて思わないんぢゃない?』

サガミのその言葉に、カイが少し動搖を垣間見せた。しかし、

「まあ、さうだな。とにかく、不死鳥の過去の寝床はライクっていう国にある。」

と、自分が動搖しているのをサガミに悟られないように、カイは話を終わらせた。

「ロングシャドウは、世界一の規模の不死鳥研究団体だつて聞いてるけど、貴重な情報とか文献とか、けつこう持つてるんぢゃねえのか?」

「まあ、他の小規模な団体に比べれば、価値の高い情報とか文献とかも、ある程度持つてたけど……。でも、大したことないわ。」

「もう、脱退したとは言え、随分ロングシャドウに冷たいな?」

カイが、微かに笑みを浮かべながら言った。

「嫌いだから。ロングシャドウが。ただ、それだけ。」

「ふうん。まあ、俺には関係ねえけど。」

2人の間に、軽い沈黙が過ぎる。

「そりゃ、最初会った時からずっと気になつてたんだけど。胸につける羽、それどこで手に入れたんだ？」

カイが沈黙を破つて訊ねた。

「これ？これは、コルサットの森の中で見つけたの。私は、不死鳥の羽だと思うけど、検査してみないことには、はつきりとは分からないわ。」

サガミが、嬉しそうな表情で薄紅色の羽を胸元から外して、手の平にのせた。

「ちょっと、見せて。」

そう言つて、カイはサガミの方に手を差し伸べた。サガミは、素直にカイに羽を手渡した。

そして、カイは受け取つた羽を丹念に、触り心地や色合い、羽の質などを調べている。

サガミは、その光景を黙つて見つめている。

そして、カイは無言で羽をサガミに返した。

「これは、不死鳥の羽に間違いない。他の野鳥とは、羽の質感や光に当たつた時の光沢の具合が、微妙に違うんだ。世の中には、こういう赤色っぽい羽を持つ鳥は、何種類かいるけど、この羽は不死鳥の落とした羽だと、ほぼ断言できる。」

カイは、眞面目な表情で言つた。

しかし、サガミは複雑な表情で応える。

「どうして、断言できるの？」

「見たことがあるからだよ。」

カイは、当然だろうと言わんばかりの顔で答えた。

「ちなみに、その羽が本物だと知れたら、本格的にいろんな不死鳥研究団体からオファーが来たり、場合によつては攻撃も受けるかもしないな。」

「オファーが来ても応じないから、問題ないわ。それに、たかが研究団体の貧弱な攻撃からなら、自分で自分の身を護ることだって可能だし。」

サガミは、いたつて強気だった。

その様子を見る限り、心配はなさそうだと、カイも思った。

「そういうえば、ロングシャドウを抜けたつてことは、不死鳥の研究は半ば諦めてる状態？」

「諦めてなんかないわよ。これからは、自分独りでのびのびと研究を進めていくつもりなの。事によつては、旅にだつて出るつもり。」

「事によつては？ 団体抜けて自由の身なら、早速旅に出ればいいじやん。」

そのカイの言葉を聞いて、サガミの表情は心なしか暗くなつた。

「父さんを置いてなんていけないから、少なくとも今は、旅に出ることはないと思う。」

「親父さん、体悪いのか？」

「もう、半年前からずっと植物人間の状態で…。どうしたって、父さんを放つてはおけない。」

サガミの複雑な表情を見て、カイは何か考え込んでいた。そして、

「それなら、俺の知り合いの医者を紹介するよ。腕も確かだし、金が充分になつて言えば、無償で面倒もみてくれる。入院させれば、しっかり看護してくれるから、安心だと思うけど。」

と、サガミにとつては願つてもない提案だった。

「その人は、どこにいるの？すぐにでも会つて話してみたい！」

サガミの表情が一気に明るくなつた。

「実は、俺も居場所は知らないんだ。コルサットの近くにあるテグスターのレストランにいる女が、病院の場所を知ってるんだ。一応、その女は俺の雇い主で、そいつがいつも俺に仕事を提供してくれるんだ。」

「カイは、いつもどんな仕事してるの？」

サガミのその言葉に、カイは悩む様子を見せた。そして、

「'P///'処理業務。」

と、カイは口元に笑みを浮かべて答えた。

サガミは、カイの見た目とは似合わない仕事だと思い、不思議に感じていた。

「一応、ここに地図書いておくから。」

そう言って、カイはテグスターにあるレストランへの道のりを地図に記した。

それを、カイがサガミに手渡した瞬間、部屋の窓を割って、外から何かが家中に投げ込まれた。

サガミは突然の出来事に困惑している。

「えー？ 何ー？」

カイは、投げ込まれた物を拾い上げた。すると、

「げつ……爆弾だぜ、これ……」

それが、時限式の爆弾だといつこ、カイは気が付いた。

サガミは、さらに動搖する。

「うそつ……？ 信じらんない……何で、爆弾なんかがウチに放り投げられたのよ……？」

「落ち着け！これは、俺が処理してくる。お前は、ここで大人しく待ってる。いいな！？」

カイはそう言って、爆弾を片手に割れた窓の外へと飛び出した。

サガミは、心配そうな眼差しでカイを見送った。

20・3 出会い（後書き）

こんなにちは。お読み頂きました、ありがとうございます。今後もどうぞよろしくお願い致します。

No.4 不老不死

爆弾は、あと30秒で爆発する。

爆弾の側面にある時計が、それを教えてくれた。

カイは、急いでコルサットの森を目指した。

その爆弾が、どれほどの威力があるかは、全く分からぬ。しかし、万が一強力な爆弾だつたら、コルサット全体が危険にさらされる。

そんなことを考えながら、カイは必死に走った。

ただ、カイはその間、自分の身を案ずるような様子は全くない。

カイは自分の身に危険が迫っているとは、全く思っていないのだ。

その理由は、彼の果てしない過去が物語る。

カイは以前、コルサットのあるシュンオウ大陸ではなく、カイオウ大陸に住んでいた。

カイは、両親を幼くして亡くし、母方の祖母の家で育てられた。

両親がいないという辛い現実にも負けず、カイは明るく活発な子どもだった。

また、他の子ども達と比べてカイは、幼いわりには思考能力が長けていて、優れた頭脳を持っていると周囲の噂になるほどだった。

そんなカイが、伝説の不死鳥に興味を持ち、不死鳥についての勉強を始めてみると、不死鳥の痕跡報告や目撃談、過去の偉人が記した不死鳥研究・調査の書物などを照らし合わせて、その居場所や寝床を突き止めるということは、そう困難なことではなかった。

不死鳥の居場所を突き止めた以上は、カイ自身も一目みたいと思うようになった。

そして、祖母の元を離れ、カイは18歳の時に一人、旅に出た。

不死鳥が居るであろうと自分で突き止めた、ライク国¹の森。

しかし近年、悪名高い殺し屋が出現したり、血に飢えた獣が増え始めたりして、この世界の治安は、確実に悪化していた。

そのため、森に辿り着くまでの道のり自体も非常に困難なものであることが予想された。

その上、辿り着いた森の中でも、危険な野獣などに襲われる可能性だつてある。

旅は、危険以外の何物でもなかつた。

しかし、幼い頃から最低限の戦闘技術や護身術を身に付けることは、

世界の治安の悪化と共に、当然のこととして考えられていたし、それは義務に近かつた。

危険が身近にある時だからこそ、自分の身は自分で護る。

それが鉄則、ということだったのだろう。

しかし、やはり危険が付き物の道中、万が一のことがあつてはいけない、と心配した祖母から、カイは護身用の短剣を譲り受けた。

旅立つてから何ヶ月もの間、猛獸や夜盗などに襲われながらも、ライク国に隣接する小さな町に拠点を設け、森の中を気持ちの向くままに歩き回った。

しかし、一向に不死鳥らしきものの影すら見当たらない。

やがて、町に拠点を設けてから一年が経過し、もう一度初めから調べなおすべきなのか、と諦めかけた時だった。

森の中を歩き回っていたカイの頭上が突然暗くなつたり明るくなつたりし始めた。

それまで、深い森の中とはいえ、陽の光は途切れることなく注いでいた。

しかし、それが遮られる瞬間がある。

カイは、頭上を見上げた。

するとそこには、大きな赤い羽根を広げ、燃え上がる炎のような赤

の羽毛を身にまとった、神秘の鳥がいた。

それが、自分が捜していた不死鳥だと、カイは時間差で理解した。

その姿は、あまりに美しかつた。

カイは、思わずその姿に見とれていた。

しかし、次の瞬間、不死鳥が思いもよらない行動を起こした。

不死鳥の真下でボーッとしているカイに、不死鳥が襲い掛かつてき
たのだ。

カイはとっさに懐から、忍ばせていた短剣を取り出した。

そして、自分の方に迫り来る不死鳥の腹を、短剣で思いつきり斬り
付けた。

カイは、そのような行動を起こしてから、すぐに罪悪感を感じた。

カイが斬り付けた傷口から、不死鳥の血がドバつと噴き出した。

カイは、その大量の不死鳥の鮮血を全身に満遍なく浴びた。

カイの姿は、不死鳥の真っ赤な血で塗り潰され、すぐに体が熱くな
つてきた。

体の熱が恐ろしくなり、カイはその場を走つて逃げた。

そして、森にある湖に勢い良く飛び込んだ。

湖の水で、全身についた不死鳥の血を、カイはキレイに洗い流そうとしたのだ。

しかし、服に染み付いた血は、全くとれなかつた。

そして、カイは水面に揺れながら映る自分を見て、愕然とする。

カイはもともと、瞳は茶色で髪も茶色だつた。

しかし、何故か不死鳥の血を浴びた今、瞳や髪の色素が一気に薄くなつたのか、瞳も髪も赤みの強い色に変化していた。

カイは、驚きはしたものの、瞳や髪の色の変化くらいなら大したことではない、ヒショックを和らげようと、そう自分に言い聞かせた。

しかし、カイの体の変化はそれだけでは留まらなかつた。

サガミの家に投げ込まれた爆弾を、カイはコルサットの森の中に投げた。

すると、爆弾は森の中で思つたよりも小規模な爆発を起こし、消滅した。

おそらく、何者かがサガミの家だけをターゲットにして作った、爆弾だったのであろう。

爆弾がうまく処理できて一安心しているカイの元に、見知らぬ男が姿を現した。

「余計なことをしてくれたな。」

そう言って、謎の男はカイの元にゅうへりゅうへりと歩み寄つてくる。

カイはポケットに手を突っ込んだ。

「余計なこと?」

カイが、嫌味な聞き返し方をした。

「そうだ。あの爆弾は、サガミの家で見事に爆発する予定だつたシロモノだ。それを、邪魔してくれただろう?だから、余計なことなんだ。」

「あんた、何者だ?」

「俺は、不死鳥研究団体ロングシャドウの一員だ。」

「1)苦労様です。」

カイは、ふざけた様子で謎の男に会釈した。

すると、謎の男は苛立ち始める。

「てめえこそ、何者だ?」

その、謎の男の質問に、カイは笑顔で応える。

「じゃない、ただのゴミ処理業務員です。」

その言葉を聞いて、謎の男は高笑いしだす。

そして、

「田障りだ。死ね。」

謎の男は表情を一変させて、カイに銃を向けた。

カイは、それを見ても微動だにしない。

そして、謎の男はためらうことなく、カイに一発の銃弾を打ち込んだ。

それは、確かにカイの胸を貫いていった。

しかし、カイは撃たれた部分をポリポリと搔きながら、

「あ。やべえ。避けるの忘れてた。」

と、大げさに悔しがる様子を見せながら、おちやらけて見せた。

謎の男は、カイのその様子を田の当たりにして、怯え出した。

「な、なんだ、お前！？化け物か！？」

謎の男は、やつと謎の男に歩み寄った。

カイは、ゆつと謎の男に歩み寄った。

「確かに、化け物だよ。だつて、俺今年で133歳になる、長寿人間だからね。」

と、カイは笑いながら言った。

しかし、見るからにカイは133歳には見えない。

どう見ても、カイは10代後半の青年にしか見えない。

謎の男は、またカイがふざけているのかと思つた。

しかし、先ほど銃弾をくらつても微動だにしなかつた彼の様子と、今の発言から考へると、

「お前まさか、不老不死なのか……！？あの、不死鳥に会つたことがあるつていうのか！？」

答えは、必然的にそうなつた。

するとカイは、これといった返答はせず、ただほのかな笑みを口元に浮かべている。

「そんなことは、どうでもいいんだ。あんた、サガミの家に爆弾投げ込んで、爆発させて、サガミやサガミの親父さんを殺して、一体どうするつもりだったんだ？」

田の前で毒をめでている謎の男は、一呼吸置いてから口を開いた。

「サガミは、不死鳥の貴重な羽を所持している。それは、我々ロングシャドウの物になるべき物。ロングシャドウを裏切ったサガミには、消えてもうひとつもつでいたのぞ。」

「なるほど。つまり、ロングシャドウの監さんは、サガミを忌み嫌つてゐるわけですね。」

カイが、眞面目なのか不眞面目なのか区別のつかない口調で言った。

「その通りだ。とにかく、わたくしの質問に答えてもらおうか。お前は、不死鳥に会つたことがあるのか？」

「ある、と書つたら?」

カイが、謎の男を探るよつと見つめた。

「ロングシャドウの研究所で、お前の身体の全組織のデータをとる。そして、本当に不老不死の体なのか調べる。そして、最終的にお前が不老不死だと分かつたら、我々ロングシャドウの一員として加わつてもらひ。」

謎の男の話を聞きながら、カイはずつと顔をしかめていた。

「じゃあ、なにつて」とにじといてください。俺、男に体触られて喜ぶ人間じゃないし、ましてや陰気そつた研究団体に参加する気もないし。交渉決裂といつことだ。」

そう言つて、カイは謎の男に手を振つた。

そんな間の抜けたようなカイの態度に、謎の男は苛立つてくる。

「俺を、馬鹿にしてんのか！？」

といつ、謎の男の叫びに、カイは振り向く、

「はい。」

と、笑顔で答えた。

そして、謎の男に背を向け、その場から立ち去りつとした。

すると、謎の男は逆上して、無数の銃弾を受けながらも、普通に歩いている。

しかし、カイはたくさんの銃弾を受けながらも、普通に歩いている。

謎の男は、その信じ難い光景に、腰を抜かした。

No.4 不老不死（後書き）

はじめまして。作者のHORACEです。どうぞ、お読み頂いた方に評価を頂くことができたようで、少しもう少しとおもいます。今後も、どうぞよろしくお願い致します。

No.5 変化

カイは、サガミの家に戻る前に、謎の男が撃ち込んだ銃弾を全てきれいに取り除いた。

服には多くの穴が空いているが、それは仕方ないのでそのままにすることにした。

カイが、サガミの家の戸をノックすると、中から氣を張り詰めたサガミの声がする。

「誰..？」

「カイです。」

サガミは、戸の隙間からカイの姿を確認すると、カイを家の中に入れ、戸をしっかりと施錠した。

「爆弾、無事に処理できたの？」

「ああ、何の問題もなく処理できたよ。」

そのカイの言葉を聞いて、サガミは安堵の息を吐いた。

「あの爆弾、ロング・シャドウの仕業なんでしょう？」

サガミが、鋭い表情になつた。

「よく分かつたな。あの爆弾を家に投げ込んだ奴は、お前をロング

シャドウの裏切り者だつて言つてたぜ。なんでも、お前が持つてゐる貴重な不死鳥の羽は、ロングシャドウが持つべき物だとか、そういうじやないとか。」

カイは、ふざけた言い回しはあるが、サガミに事実を忠実に伝えている。

そのカイの言葉を聞いて、サガミの表情は一気に険しくなった。

「やう、そんなこと言つてたんだ……。どこまでも、バカで救いようのない奴らね……。結局、奴らはこの家を爆破して、邪魔者を消し去つて、ゆうゆうと羽を奪い取るつもりでいたってことね……。憎たらしく……。」

「投げ込まれた爆弾は処理したけど、投げ込んだ張本人には特に手を出してないから、もしかしたらまた何か仕掛けてくるかもしれないな。」

カイが、心配して言つているのか、他人事と思つて楽しんでいるのか、よく区別しつくい表情で言つた。

するとサガミは、

「その時は、潰すまでよ。」

と、明らかに怒りの滲み出た瞳でつぶやいた。

カイは、サガミのその表情を見て、ロングシャドウとサガミとの間に、少なからず何か過去の因縁があるので悟つた。

しかし、あえてカイは深く追求しなかった。

「爆弾に対して素早く対処してくれたこと、感謝してるわ。ありが
とつ。」

そう言って、サガミはカイに深く頭を下げた。

すると、カイは表情を綻ばせ、

「やめてくれよ。俺は当然のことをしただけだぜ。」

と言つて、サガミの肩をポンポンと軽く叩いた。

その、カイの人間味に溢れた言葉を聞いて、サガミは胸の中で凍り
付いていた部分が、微かに溶けていくような心持ちになった。

その時、サガミはカイの前で初めて自然な笑顔を浮かべた。

翌日、サガミは思わず出来事に遭遇した。

まだ早朝だというのに、家中でサガミがドタバタと走り回つてい
る音が響き、カイは目を覚ました。

そして、サガミから借りた部屋から出でみると、サガミは一人で慌
てふためいているような様子で、家中をグルグルと歩き回つてい
る。

「どうした？何かあつたのか？」

カイが、眠い目をこすりながらサガミに訊ねた。

すると、サガミはカイの方に勢い良く歩み寄った。

「大変なの。父さんが、目を覚ましたの！！」

サガミの瞳は潤んでいる。

「そうか、良かつたなあ！」

カイが、満遍の笑みでサガミに言つた。

すると、サガミの瞳から大粒の涙が流れ落ちた。

これまで、1人で父親の看病をしてきたサガミにとつて、父親の回復は強く願つていたことだつた。

そして、あまりに突然父親が目を覚ましたという現実を前にして、サガミは気が動転していたのだ。

さらに、サガミは長い間信頼していたロングシャドウの研究員たちから冷たい仕打ちを受け、拳句の果てには父親を植物状態にまでさせられた。

サガミに心優しくしてくれた人物など、周囲には存在し得なかつた。

しかし今、目の前にいる会つて間もないカイは、曇りのない笑顔で

自分に心優しい言葉をかけてくれた。

それが、サガミにとって、嬉しくて嬉しくてたまらないことであった。

サガミは、父親のもとへ向かった。

「父さん……父さん？」

そのサガミの声に、

「サガ、//…。おはよ。」

サガミの父は、穏やかな笑顔でサガミの瞳を見ている。

「良かつた……。父さん、本当に……良かつた……。」

サガミは、父親の手を握り締め、そのぬくもりをかみ締めた。

カイは、その光景をドア越しに眺めると、静かに家を去つて行つた。

サガミが気付いた時には、カイの姿は家のどこにもなく、ゴルサットのどこにもカイの姿は見当たらなかつた。

サガミの心の中には、半分何も言わずに去つて行つたカイへの不満と、もう半分は、自分ではよく分からぬ気持ちがあつた。

それから数日後、父親の容態もだいぶ良くなり、意識もはつきりとしていて、回復の兆しが明確に見えてきていた。

爆弾の事件から、数日が経過したが、それ以来特にこれといった事件は起こらず、サガミは父親と2人で穏やかな日々を送っていた。

その数日間での唯一の変化といえば、ロングシャドウが研究所を移動したことぐらいだった。

もともと、ロングシャドウはコルサットの外れにある例の洋館を研究所として使っていた。

それはロングシャドウの者しか知らないことだが、研究員が夜な夜な研究所に姿を現す影を、コルサットの住人が「亡霊」と勘違いしたのだった。

しかし、ロングシャドウの人間は、洋館に堂々と足を踏み入れていたわけではなかった。

洋館の近くにある林から、秘密の通路を使って洋館を出入りしていたのだ。

そして、通路を抜けた先にある鉄の扉のさらに先の、薄暗い石の階段を上っていくと、そこは洋館の一階の一番右端の部屋に辿り着く造りになっていた。

そのため、コルサットの住人が夜な夜な日撃していた「亡霊」の影が現れる場所が、「洋館の一階の一番右端」と、特定されていたのだ。

そこは、研究員たちがよく通る場所。

すなわち影を叩撃されやすい場所であった。

コルサットの「亡靈」の噂は、ロングシャドウの研究所移動と同時にきれいさっぱり消え去った。

商人の声が響く賑やかなコルサットは、「亡靈」の噂が消えたら、より一層の賑わいを抱いていた。

サガミもまた、父親が植物人間から脱したという一つの幸福の中にいた。

しかし、そんなサガミの心の中には、モヤがあつた。

サガミはずつとカイの事が忘れられないでいた。

特に理由もなく、サガミはカイの事が気になつてしかたがなかつた。

確かにカイは、容姿端麗で、程よく上背もあり、樂観的でユーモラスな様子であることから、一般的な目から見れば、間違いなく魅力的な人間だった。

しかし、サガミが気になつているのはそのような事ではなく、カイのどこか不思議な雰囲気や、全身にまとう不思議なオーラ、とにかく全てが不思議な存在であったということが、気になつてしかたがなかつた。

「サガミ、父さんに気兼ねなんてしないで、どこか出掛けできたら

どうだ？父さんは、一人で平氣だから。「

サガミの父親は、意識を取り戻してからは驚くほど回復が早く、今では杖を使えば一人で歩くことができるほど状態にまでなつていた。

「でも、行きたい所なんてないし……。」

サガミが、苦笑いで答えた。

「行きたい所なんてなくて良いんだよ。父さんはただ、サガミに息抜きしてほしいんだ。ずっと父さんみたいな足手まといを抱えて、今まで大変な苦労をしてきただろ？と思つ。もちろん、やりたいことも満足に出来なかつただろ？と思つ。父さんは、サガミにこれ以上迷惑は掛けたくないんだ……。」

サガミは、父の言葉に返答する言葉が、なかなか見つけられなかつた。

そして、

「私、父さんのこと足手まといだなんて思つてないよ。確かに、大変なことはあつた。でも、それが苦労だつたなんて、私は思わない。絶対、思わないよ！」

サガミは、力強く父親に気持ちを伝えた。

しかし、「自分のやりたい」と満足に出来なかつた」というのは、図星に近いものがあつた。

サガミは、不死鳥研究をもつと根底まで追及したいと思っていた。

しかし、それを断念させたのは、他でもない父親の存在があつたからだつた。

父親に罪はない。

だから、サガミはそれを父親に素直に伝えることはしなかつた。

結局、サガミは父親に押し切られて、一人で外出することとなつた。

N o . 5 變化（後書き）

「なんば。」OZONEです。お読みいただきまして、ありがとうございます。今後も、どうぞよろしくお願い致します。

コルサットは、相変わらず騒がしいほどの賑わいに満ちていた。

これまで、サガミは落ち着いてコルサットの商店を見ることが少なかつた分、賑やかな商店街をゆっくりと目的もなくただ、歩いていた。

その間も、サガミはずっとカイについて考えていた。

カイは、一体どんな人物なのか。

何故、黙つて去ってしまったのか。

サガミには、分からぬことばかりだった。

その時に、サガミはふとカイのある言葉を思い出した。

それは、カイにいつも仕事を提供しているといつ、テグスターのレストランの女の話だ。

サガミは、カイからその女のいるレストランへの簡単な地図を受け取っていた。

もしかしたら、カイはそのレストランにいるかも知れない。

サガミは、そう思った。

そう思つてからのサガミの行動は、実に早かつた。

サガミは迷わず、コルサットの近くにある小さな町テグスターへと足を向けた。

テグスターはコルサットとは違い、別の賑わいに満ちていた。

サガミは少し、勢いでテグスターを訪れたことを後悔した。

しかし、サガミは純粋にカイに再び会うことを望んでいた。

カイが記した地図を頼りに、サガミは例のレストランへと辿り着いた。

無意味に緊張しつつ、サガミはレストランの扉を静かに開けた。

すると、入り口の前の前にあるカウンターで、ひと際目を引く美女とサガミは目が合つた。

すると、美女はおもむろにサガミのもとへと歩み寄った。

そして、

「いらっしゃいませ。初めての『』来店ですよね？」

眩しいほど綺麗な笑顔で、サガミに美女は訊ねた。

サガミは、ぎこちない笑顔で頷いた。

すると、その美女はサガミをカウンターへと案内した。

「どうぞ、そこに掛けください。」

サガミは、素直に美女が指した先のイスに腰掛けた。

サガミは、カイに仕事を提供しているという女が、一体このレストランのどこのいるのかと、辺りをキョロキョロと見回した。

すると、

「誰かと待ち合わせですか？」

美女が、サガミにすかさず訊ねた。

サガミは、少し困った表情で、

「えー? いや、待ち合わせとかじゃないんです。……あの、……力
いつて人、ご存知ですか……?」

そのサガミの質問に、美女は微妙に驚いたような表情を浮かべている。

そして、

「あなた、カイの知り合い?」

サガミは、美女の口から願つてもない言葉を聞いた。

「え…あの、もしかして、あなたがカイに仕事を紹介してるって人ですか？」

「仕事を紹介?……、ああ、まあ、そういうことになるかしら。もしかして、私を捜してたの?」

「はい。実は、あなたに訊きたいことがあるんです。」

「訊きたいこと?何かしら?」

美女は、穏やかな笑顔を浮かべている。

サガミは、カイのことを訊ねるつもりでここへ訪れたが、とりあえず本来その美女に訊ねるべき質問からしてみた。

「えっと、あのぉ……、私の父が、半年間植物状態だつたんですが、それを最近脱することができまして…。でも、この先いつまた再発するとも分からないので、名医と言われているお医者さんをあなたに紹介してほしいんです。あなたなら、その名医の居場所をご存知だと、カイから聞きました。」

そのサガミの言葉を聞いて、美女はしばらく考えている様子だった。

「そう、分かった。すぐにでも、紹介するわ。」

サガミは、美女の言葉を聞いて、喜びと安心をかみ締めた。

「あ、あの…。あと、もう一つ訊いていいですか?」

サガミが、慌てて言った。

すると、美女は迷わず頷いた。

「カイが、今どこにいるか存知ですか……？」

「『めんなさいね、それは分からないの。カイって、自由奔放な鳥のよう、知らないうちに遠くにいたり、気付いたらいつの間にか近くにいたり、不思議な奴だから。常に居場所を把握するのは、難しいのよ……。』

美女の返答は、予想外に早かつた。

「……、そうですか……。」

サガミは率直に、落胆した。

「で、その名医の居場所についてなんだけど。」

サガミの落胆ぶりを目にしつつも、美女は早速本題へと進んだ。

「あ、はい。」

サガミはすかさず応えた。

「その名医の名はカーザ。ここから北に行つた先にある、シオソつていう町に今はいるの。でも、近いうちに別の町に越すつて言つたから、なるべく早く訪ねた方がいいわよ。」

「シオソつて、大きな港町のことですよね？」

サガミが美女に訊ねた。

「そうよ。そこの漁港の近くにある白い建物の一階に、彼は居るわ。

」

そして、美女は突然、何か思いついたような表情を見せた。

「ちょっと、待って！すぐに戻るから。」

そう言って、美女はその場を離れ、カウンターの横にある階段を足早に下つて行つた。

そして、何分と経たないうちに、サガミの前に戻つて來た。

そして、

「これをカーザに見せるといいわ。」

と言つて、美女はシルバーの小さな星の飾りがついたネックレスを、サガミに差し出した。

サガミはそれを素直に受け取り、

「ありがとうございます。」

と、深く頭を下げた。

「今日は、突然押しかけて、お騒がせしました…。」

と言つて、サガミは美女に再び頭を下げるとい、レストランを後にしよつとした。

すると、

「ねえ。」

美女がサガミをとつさに呼び止めた。

サガミは、ゆつくりと振りかえる。

「カイに会いたい？」

「え……？」

美女のその思いがけない質問に、サガミは言葉に詰まる。

「カイに会いたければ、またここへ来るといいわ。」

美女はそう言い残すと、カウンターの横の階段を下りていった。

サガミは、じばりくその場に立ち尽くし、考え込んでしまった。

テグスターのレストランを後にし、サガミはコルサットに戻つて來た。

美女の最後の質問に、サガミは正直困った。

カイにはもう一度会いたいとは、確かに思っていた。

しかし、美女の「会いたい」かの質問の中には、何か別の要素が含まれているようすで、安易な気持ちではYEUともNOとも答えられなかつた。

ただ、サガミは確かにカイに会いたいと思つていた。

ゴルサットの自分の家に戻り、サガミはおもむろにソビングのイスに腰掛けた。

すると、そこには置手紙が一枚置かれていた。その内容を見た瞬間、サガミは勢い良く立ち上がつた。

「何、これ……！？」

サガミが見た置手紙には、いつ記されていた。

「不死鳥の羽を3日以内にシオンの港まで持つて来い。さもないと、お前の父親は亡き者になると思え。」

そして、その文末には「ロングシャドウ」と記されていた。

サガミは、歯を食いしばつた。

そして、手紙を破り捨て、怒りに満ちた表情で家を飛び出していつた。

取り引き場所は、奇しくもサガミが名医を訪ねようとしていた町で
あつた。

No.6 少女と美女（後書き）

こんには。作者のJOHNEYです。
お読み頂きまして、ありがとうございます。
今後もどうぞ、よろしくお願ひ致します。

サガミが去った後のテグスターのレストランに、カイは現れた。

「ミキカ、俺はもうこの仕事から足を洗うって言つただろ？！？」

レストランに入るなり、カイはカウンターにいるミキカに勢い良く詰め寄つた。

するとミキカは怯える様子も悪びれる様子も見せずに、

「だから、何？」

と、あっさりと答えてみせた。

すると、カイは逆上するでもなく、フウッとため息をつくと、ミキの目の前のカウンターのイスにドカッと腰掛けた。

「いいか、ミキカ。俺はもう、残酷な人間ではいたくないと思つてるんだ。これ以上、他人の血で自分の手を汚すようなことは、したくないんだよ。」

そのカイの言葉に、

「じゃあ、なんでこれまで私に協力してきたのよ！？変な偽善か何か！？」

と、ミキカがカイに怒鳴り返した。

レストランの客たちが、一人を凝視している。

「俺はお前の役に立ちたかったんだ。だから、お前からすれば、俺のしたことを偽善だと思っても仕方がない。でも、少なくとも俺自身は、お前に偽善をしたなんて思つてない。」

カイは、ミキ力をなだめるような口調で言つた。

「じゃあ、何で突然私を見放すの…？私はまだ、カイの力が必要よ…。」

ミキカは落ち着いてはいるが、気持ちの高まりがこもったような震える声で言つた。

「……、お前は、この先もこれまでと同じように過ごしていくのか…？」

そのカイの質問に、ミキカは一瞬黙り込み、

「……。……、やせざるを得ないの…。」

と、つぶやくような声で答えた。

カイは返す言葉が見つからなかった。

ミキカに何と言えば良いのか考えていた。

「……、まあ、いいわ。」

ミキカが浅いため息の後に言つた。

「無理に繋ぎとめるのなんて格好悪いし……。説得してまで続けさせるべき仕事でもないし……。潔く諦めるわ……。」

ミキカは、とても潔く諦めたとは思えないような表情で、しかし淡々とした口調で言った。

カイは、皿を呑ませないよう微かにうつむいているミキカを、複雑な表情で見つめている。

すると、

「…………、もう行つて。お密さんが見てるから。」

ミキカは棒読みのセリフのようてカイに言った。

カイは、静かにイスから立ち上ると、一度もミキカの方を振り返ることなく、店を後にした。

そのカイの後ろ姿を見届けたミキカは、無言でグラスを洗い始めた。

カイは、ミキカのレストランを後にしてから、テグスターの町をあてもなくただフラフラと歩いていた。

そして、途中でズボンのポケットから、茶封筒を取り出した。

その封はまだ切られていない。

封筒のあて先には、「Mr.Kai」と記されており、差出人は「E・Mikika」となっている。

カイはその場に立ち止ると、その封筒を開けた。

すると、その中には一枚の紙が入っている。

その紙を見たカイは、テグスターの裏通りにある古びたバーへと足を向けた。

バーに入るとカウンター席から、火のついていないタバコを咥えながら、店に入つて来たカイを手招きしている男がいる。

カイは、その男の横の席についた。

「遅かつたな。」

男は、イスに座つたカイにすかさず言った。

しかし、カイはその言葉には特に応えずに、「いつも」とバーーンに言った。

男がカイの方へ、カウンター テーブルの上で裏返しに伏せた写真と紙をスッと渡した。

しかし、カイはそれを手で止める。

カイのその行動に、男の目が鋭くなる。

「何のつもりだ…？」

男が言った。

それと同時に、カイの目の前にバー・テンググレープフルーツジュースを差し出した。

「あなたの思った通りだよ。」

そう言って、カイがグレープフルーツジュースを一口飲んだ。

「じゃあ、この仕事を断ろうってわけか…？」

男がタバコに火をつけた。

カイが口元に笑みを浮かべた。

「ミキカには、もう言つてきたよ。もつ、足を洗うつてね。」

そう言って、カイは男の胸ポケットからタバコを取り出すと、それに火をつけた。

「ははははははは…！」

男が大笑いしながら、タバコの煙を吐き出している。

「カイ、笑わせてくれるじゃねえか。今日のは格段につける[冗談だ。」

「

カイは、フウ～～とタバコの煙を吐くと、

「冗談じゃな～よ。本気だ。」

と、灰皿にタバコの灰をポンポンっと落とした。

一時の間のあと、男がタバコを灰皿に押し付けた。

「いいか、カイ。これだけはよく覚えておけ。お前は、この世界から足を洗つてのうのうと表社会で生きていくつもりでいるかもしねえが、… それは、俺たちへの裏切りだ。お前を俺たちに紹介したミキカは、当然、死をもつて償うことになる。それでも、お前はそんなバカなことを言つつもりか…？」

「……、それは、困るな。」

カイは、確かに男に脅されているが、言葉に緊張感がない。

「何で、ミキカが死ななきやなんないんだ？抜けるって言つてるの は俺なんだから、俺を殺せばいいじゃん。」

その言葉に、男はフツと笑つた。

「そんなに、ミキカが大事か、カイ？・・・・・いいだろ？。ミキカの命は奪わない。それは約束しよ～。そのかわり、お前の命はないものと思え。いいな？」

「ああ、いいよ。」

カイはそう言って、タバコを灰皿に押し付けた。

すると男が、

「ただ、条件がある。」

と、グレープフルーツジュースに手を伸ばしたカイに言った。

「条件？」

「そんなにミキカが大事なら、ミキカが最後にお前に与えた仕事くらい、片付けて、逝け。」

カイは、小さくため息をついた。

「分かったよ。」

そう言って、カイは、男が差し出した写真と紙を受け取り、ズボンのポケットにしまった。

そして、グレープフルーツジュースを一気に飲み干し、その代金をテーブルに無造作に置くと、席を立つた。

「じゃあな、カイ。もう会うことはないだろ？ よ。」

その男の声に、

「そのタバコ、不味いな。」

と、カイは顔をしかめて応えると、店を出て行つた。

男はそのカイの言葉に、先ほどよりさらに大きな笑い声を上げていた。

バーを出てすぐに、カイは男から受け取った紙をポケットから取り出し見た。

すると、カイの足はその場に張り付いたように、動かなくなつた。

そして、おもむろにポケットから写真を取り出した。

そこには、カイには見覚えのある顔があつた。

カイは、しばらくその場で考え込んだ後、足早に動き出した。

No.7 これから（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEです。本日一度目の投稿です。お読み頂きまして、ありがとうございます。これからもどうぞ、よろしくお願い致します。

「コルサットの船着場から出航した船の中に、サガミはいた。

港町シオンまでは、コルサットから出でている定期船で向かうことにしたのだ。

サガミの瞳には、怒りが滲み出でていた。その拳は、強く握られている。

シオンには、翌日の午後到着する予定だ。

テグスターのミキカのレストランは、ティナータイムを過ぎすべく来店する客で、忙しさを増していた。

店の従業員は慌ただしく走り回つている。

そこへ、一人の男が来店する。

「いらっしゃいませ。」

従業員が応対に向かつた。

しかし、すぐにミキカの方へとその従業員が駆け寄つてきた。

「ミキカさん。あちらの方が、ミキカさんとお話をあるとのことなんですが。」

「！」の忙しい時に、一体誰？』

ミキカはチラッと男の方を見た。

すると、男はミキカの方を見て、右手を上げている。

ミキカは、ハッとした表情を浮かべると、

「悪いけど、私はここを外すわ。もし手が回りきらなくなつたら、呼んで。」

と従業員に告げると、男の方へと駆け寄つていった。

「何か、用？」

ミキカが、右手を挙げていた男に露骨に嫌そうな表情で言った。

「そんな顔したら、美人が台無しだな。お前の顔が見たくなつて来ただけだ。」

「ふざけないで！」

ミキカが男の言葉に小さく怒鳴つた。

「はははははははっ！そんなに怒るなよ。冗談だ、冗談。カイのことでお前に伝えておきたいことがあつたんだ。」

「カイのことで……？」

「おこおこ、」のまま立ち話させる気か？」

その男の言葉に、ミキカは小さくため息をつくり、カウンター横の階段を下りた先にある地下の部屋へと、男を案内した。

そして、部屋へ入るなり、

「それで、カイのことで何を言いたいの？」

ミキカは、強い口調で言った。

「せつめ、いつものバーでカイと落ち合った。」

「やべ。」

「そしたら、カイの奴、何て言ったと思ひ？」

「まあ。」

「」の世界から足を洗うつて言ひ出しあがつてよ。しかも、それはお前に、もう伝えてあるとか言つてた。」

やつ言つて、男はタバコを取り出して火をつけた。

「ちよつとーーー、禁煙なんだべ。」

「ああ、悪い悪い。忘れてた。」

男は素直にタバコの火を消した。

「確かに、カイから聞いてるわ。もう、他人の血で自分の手を汚したくないんだって。そんな奇麗事言つてるような奴に、これ以上協力してもらつてもリスクを抱えるだけだわ。」

「也也也也也也也也」——

男は笑い出した。

「何がおかしいの！？」

「いやあ、これは見事なカイの片思いだなあ、と思つてよお。」

「片思い？何の話よ。」

「まあ、良いんだ。お前がそういう気持ちでいるなら、話は早い。」

男はミキカの瞳を覗き込んだ。

「お前に、指令を出す。一カイを殺せ！」

それで、男は部屋を出て行った。

三井がは
すかさす男を追いかけ

「ちょっと待って、タンケ！」

叫ぶように男を呼び止めた。

すると、男はミキカを振り返る。

「簡単だ。お前が色目を使えば、カイなんてイチコロ。一瞬で終わる。

」

その男の言葉に、ミキカは呆然と立ち尽くした。

コルサットから出た定期船は、シオンの港に横付けされた。

サガミは急いで下船すると、港を一心不乱に見渡した。

取引のためにサガミを待っているであろう、ロングシャドウの人間を探しているのだ。

しかし、それらしい人間は見当たらない。しかし、サガミは思わず人物を目にする。

「・・・・・・・・カイ・・・・？」

サガミが、目をこらして見ている先にいる人物が、サガミに気が付くと、歩み寄ってきた。

確かにそれは、カイだった。

するとカイは、

「まあが、こんな所で会つとは思わなかつたなあ。親父さんは、その後どうだ？」

と、万遍の笑みで言つた。

すると、もともと暗かつたサガミの表情は、一層暗くなつた。

しかし、

「何なの、あんた！？ いきなりいなくなるなんて、無礼だと思わな
いわけ！？」

一気に顔を上げると、サガミはカイに詰め寄つてきた。

その表情は実に荒い。

「そんなん、怒るなよ。・・・その節はお世話になりました。」

と言つて、カイはサガミに会釈した。

しかし、ゼニがちやかされてこるようドサガミは不愉快だった。

「・・・もう、ここーあんたと話してると疲れるー。」

「おーおー、ちょっと待つてー。」

その場を離れようとしたサガミを、カイがすかすか呼び止めた。

「お前、何でこんな所にいるんだ？」

そのカイの質問に、サガミはうつむいた。

そして、何も答えようとしない。

「親父さんも一緒にいるのか？」

カイの質問に対し、サガミの口が動く様子がない。

カイは、フウッと微かなため息を吐いた。

すると、サガミは突然ハツとした表情になり、

「あんたには、関係ない。」

と、カイに呟くと、突然走って行ってしまった。

「え？ おいつ！」

カイの声は、サガミには聞こえなかつた。

20.8 これから・・・(後書き)

こんばんは。作者のHOSHINOです。お読み頂きまして、ありがとうございます。これからもよろしくお願い致します。

息を切らしたサガミが立ち止まつたのは、シオンの港に並ぶ建物の路地裏だった。

「何で、逃げるの？」

サガミが大きく息を吸い込んでから言った。

そのサガミの言葉に、険しい表情の男がにらみをきかす。

「父さんは、どうへ？」

サガミは大きく一步、前に出た。

「ああ、俺は知らねえよ。それより、羽は持つてきたんだうつな・・・？」

男の態度に、サガミはイラつきを覚える。

「父さんの無事が分かるまでは、羽は渡さない。」

「ふざけるなつ！ 羽が先だ！ 渡せ！…」

男は、サガミの胸ぐらを鷲掴みにして怒鳴つた。

「ふざけてるのはそつちだつ！ 父さんを返せ！…」

サガミは、男の胸ぐらを鷲掴み、怒鳴り返した。

すると、逆上した男が懷から銃を取り出し、その銃口をサガミの額にあてがつた。

サガミは、男の胸ぐらから手を離し、歯を食いしばった。

「なめんなよ、くそアマー！」

「私を殺せば、羽は手に入らないけど、いいの……？」

「なんだとつ！？」

男は、サガミの額に当たっている銃口を強く押し付けた。

サガミの表情が歪む。

「私が今、羽を所持しているとは限らないでしょ……？どこかに隠しているかも……」

そのサガミの言葉を遮るよつて、サガミの背後から声がする。

「その心配はない。身包みはがして確認するまでだ。」

びつやらサガミの田の前にいる男は、自分の仲間たちがいるこの路地裏へとサガミをおびき寄せる役目をしていたようだった。

サガミは、自分の行動の軽薄さに後悔した。

よく見れば、敵は全部で5人いる。

明らかにサガミにとっては不利な状況だった。

どうしようかと、頭の中で思考を巡らせているが、一向に名案が浮かばない。

「大人しくしていれば、命までは奪わない。」

その男の言葉を聞いた瞬間、サガミは背筋に悪寒のような寒気を感じた。

しかし、それは怯えからくるものではなく、心の底から嫌気を起しているのだ。

もちろん、サガミが言われた通りに大人しくなど、しているわけがなかつた。

サガミは、背後にいる男が伸ばしてきた右腕を両手で瞬時に掴むと、目の前で銃を持っている

男に向かつて、背後の男を投げ飛ばした。

その間にその場を逃れようとしたサガミだったが、別の男の容赦ないパンチが飛んできた。

それをまともにくらつてフリフリしたサガミは、もう一度男の拳が飛んでくる。

しかし、それはサガミに当たらなかつた。

再び殴られることを覚悟して目を閉じたサガミだったが、覚悟した

はずのパンチが飛んでこない。

サガミは恐る恐る田を開けた。

すると、パンチしようとした男の腕を誰かが後ろから掴んでいる。

「サガミ、 こんな所にいたのかよ。 いきなり走つて行つちまつから、 何かと思つだろ？！」

そこにいたのは、 サガミの危機的状況を知つてか知らずか現れた力イだつた。

サガミは、 思わぬ救いの手に、 ただ啞然としている。

「何だ、 てめえはつ！？ 邪魔立てすると、 ぶつ殺すぞ！！」

カイに腕を掴まれている男が、 漆い剣幕で怒鳴つた。

しかしカイは、

「こんな人気のない所にいるから、 チンピラに絡まるんだぞ。」

男のことは、 完全に無視している。

そんなカイの態度に、 男は顔を真っ赤にして逆上する。

「てめえ・・・！？！俺をバカにしやがつて！？」

そう叫びながら、 男はカイに掴まれた腕をほどくと、 素早くカイのみぞおち目掛けて拳を下から振り上げた。

しかし、その拳をカイはいとも簡単に左手で受け止めると、

「あんた、うるさいよ。」

と言つて、その掴んだ男の拳で、男の顔面を殴りつけた。

男は、鼻血を出しながら、その場にへたり込んだ。

それを念図にするかのように、他の男たちもカイに立ち向かって來た。

しかし、彼らもまるでカイに弄ばれるかのようにして、倒されていった。

そして、カイとサガミの田の前には、銃を持っている男一人となつた。

すると、

「あ！」

カイが、その男を指差して叫んだ。

「あんた、どつかで会わなかつたか？」

その、カイの言葉に、

「お、お前は、あの時のバ・・・・・」

と、男が反応したが、その口をカイは素早く塞ぎ、その手から拳銃を取り上げると、

「しゃいひー！」

と、人差し指を口元に立てて笑顔を浮かべた。

「思い出したよ。この間、サガミの家に爆弾投げ込んだ奴だ、こいつ。」

男の口を塞ぎながら、カイはサガミに言つた。

「こいつが、そなー？」

サガミは、抜けていた気を一瞬で取り戻すと、ドスドスと音が出るくらこの迫力の足取りで、カイに口を塞がれた男の前に歩み寄つた。

男は、そのサガミの迫力にひどく怯えている。

「お前……ただで済むと思つなよ……」

そう言つて、サガミは男の腹を勢い良く蹴り上げた。

男は低い声で唸る。

「父さんは、どこののー?早く、答えるーー！」

そのサガミの圧倒的な迫力に、男はうんうんと頷いている。

カイが、それを見て男の口から手を抜けた。

「力、カーザつていう医者の所だ！・・・・・お、俺は、ここにサガミをおびき寄せるように言われただけなんだ！だから、許してくれ！あの爆弾だって、俺が考えてやつたことじゃねえ！－俺は命令されてやつただけだ！本當だ－！」

男の瞳は必死だった。

とても偽りを述べているようには見えない。

その瞬間、パーンッ！－！という破裂音が響いた。

辺りを見渡しても、人影がない。

「ちょ、ちょつと－－じつしたの－？」

サガミが叫んだ。

破裂音の後に、男が目を見開いてその場につづ伏せに倒れこんだのだ。

その口からは血が流れ出ている。

「う、うそ－何なのこれは・・・－？」

「誰かに撃たれたみたいだ。」

カイが、男の体を起こしながら言った。

その表情は、今まで見たことのないような真面目なものだった。

「死んじやつたの・・・？」

サガミが、カイに恐る恐る訊ねた。

すると、

「・・・ああ、もう息をしてない。」

カイは神妙な面持ちで答えた。

サガミの顔は一気に青ざめた。

「とりあえず、この場を離れたほうが良いな。」

と、カイが言つた瞬間、どこからともなく銃弾が一人に浴びせられた。

地面上に当たつた銃弾が、砂煙を起こす。

サガミをとつさに護つていたカイが、

「サガミ、走れ！」

と叫ぶと、サガミの腕を引いて走り出した。

二人は、全力疾走でその場を離れ、なんとか難を逃れた。

こんには。作者のJOHNEYです。投稿が少し滞りがちで申し訳ありません。。。この後も、少しお時間頂くことになるかもしれませんが、どうか見放さずにお願い致します（汗）

「さつるのは、一体何だったの……？」

サガミが、逃げて来たシオンの港で、上がった息を整えながら言った。

「さあな。たぶん、あの男と同じよう消费品をしたんだろうな。」

「消す！？何で！？」

サガミが、明らかに驚いた様子で言った。

「…………、さあ？」

口元に微かな笑みを浮かべながら、カイは首をかしげた。

「あ、そうだ。『何で？』と言えば、サガミ、さつき何であるの男に親父さんの居場所を訊いてたんだ？」

カイが、とぼけた表情で言った。

「え？ ああ、あれね……。実は、…………ロングシャドウの奴らに連れ去られたの……。返してほしければ、羽をよこせってさ。」

「へえ。また、汚い」とをするねえ。じゃあ、すぐ親父さん迎えに行つたほうが良いかもな。」

そのカイの言葉に、サガミが何故?という表情をした。

「取引が成立しなかつたんだから、親父さんに危害が加わってもおかしくないだろ?」

カイは、明らかに他人事だと思っている素振りでいる。

特に一大事とは、思っていないようだ。

「早く、カーザつていう医者を探さなきやつ……」

サガミの表情が一変して、うろたえ始めた。

「そついえば、カーザつて名前、どこかで聞いたことがあるなあ……」

カイが、遠くを見ながらアゴに手を当てるて考えている。

「あ……レストランの女人に紹介してもらった医師の名前と同じだ!!」

サガミが、カイの大きな独り言に反応した。

そして、サガミは港で一軒だけ白い壁の建物を見つけると、一目散に走つて向かつた。

サガミは、三階建ての建物の一階に階段で勢い良く駆け上った。

そして、一階の部屋の戸をノックもせずに勢い良く開け放った。

すると、

「わああつーー何だーー何だーー？」

中にいた白衣の男が、大袈裟なほど驚きぶりで、薬品を床にぶちまけた。

「何だ、キミはーーノックもせずに入つてくるなんて、失礼だぞーー！」

白衣の男は、床で小さな池をつくっている薬品を雑巾で拭きながら言った。

「あ、あの、・・・・・」めんなさい・・・・・。」

サガミが、我に返つたように、小さくなつた。

「それで、何か、用かい？」

白衣の男のその言葉に、

「私の父が、一いち方に来ていませんかーー？」

サガミが、掴みかかるような勢いで白衣の男に迫つた。

「キ、キミのお父さん? まあ? ・・・・、ただ、先日ここに連

れてこられた中年の男性だつたら入院してゐるけど、その人がそうなのかな？」

「さつと、そうです！その人に会わせてください……」

そのサガミの言葉に「どうぞ」と白衣の男が答えると部屋の奥から、

「その声は、サガミか……？」

杖をついた中年の男が現れた。

「…………父さん…………」

サガミは、父親に駆け寄ると、その体を強く抱きしめた。

その感動の再会の場に、一足遅れでカイが到着した。

「良かつた。無事だつたみたいだな。」

カイが、小さく安堵の息を吐いた。

すると、

「あれ？ カイ？」

白衣の男が、カイの顔をまじまじと見て言った。

「…………カーザって、やつぱりあんたのことだつたのか。」

どうやら、カイと白衣の男もといカーザは、顔見知りのようだ。

二人は笑顔で握手した。

サガミは、父親と二人で建物の屋上で談笑していた。

その間にカイは、カーザに少し話そうと言われ、部屋でカーザと机を囲んで話し始めた。

「ミキカは、元気にしてるか？」

カーザの最初の質問は、それからだった。

「ああ。変わりないよ。」

「何年ぶりに会つんだっけ？」

そのカーザの質問に、カイが少し考えた後、

「確か、・・・・・一年か二年くらいじゃないか？」

と、カーザから目をそらして答えた。

「そうか。もう、そんなに経つか。・・・・・、カイ、お前は変わらないな。」

カーザが一直線にカイを見ながら言った。

その瞳には、どこか鋭さがある。

「たかが、一年や二年で、変わらないだろ？ そういう風にあなたこそ
変わつてないじゃん。」

カイが、苦笑いを浮かべて言った。

「俺をバカにしてもうつちや困るな、カイ。俺が言つてるのは、そ
う言つ意味じゃないんだ。」

「じゃあ、どうこう意味だよ？」

少し不機嫌そうに聞き返したカイに対し、

「じゃあ、唐突に質問しても良いか？」

カーザが意味深に言つた。それに、カイは複雑な表情で小さく頷い
た。

「お前は、不老不死なのか？」

そのカーザの質問に、カイは黙り込んだ。

部屋の壁に掛けてある時計の針が動く音だけが聞こえる。

「何で、やつ思つんだ？」

カイが質問し返した。

「勘かな？」

カーザがイタズラ小僧のような顔で笑つてみせた。

するとカイは、

「何で、分かつたんだ？」

不思議そうな表情で訊ねた。

「勘だよ。」

カーザは、再びイタズラ小僧のように笑つてみせた。

しかし、その答えに満足していない様子のカイを見て、

「半分は勘だけど、実は、もう一人不老不死の奴を知つててね。それで、もしかしたらと思つたんだよ。」

イタズラ小僧の中に微かな真面目さを出した笑顔で言つた。

「なるほど・・・。まいつたね・・・。今まで関わった人間には、誰一人として気付かれないように配慮してきてたんだけどなあ。」

カイが、苦笑いを浮かべながら頭をガシガシと搔いた。

「あははは！氣にするなよ！俺は、誰にも言わないから。」

カーザがそう言つた次の瞬間、部屋の戸がゆっくりと開いた。

カイとカーザは、そちらを振り返った。

そこには一人の男が立っている。

「随分、楽しそうにお話しているところ悪いけど、お邪魔するよ。」

「急患ですか？」

カーザがその男の方へ駆け寄るつとしたのを、カイが即座に腕で制した。

「何で、あんたがここにいるんだ？」

カイが、その男に言った。

「あれ？ カイじゃねえか。お前、何でこんな所にいんだよ？」

それは、先日『テグスター』のバーで会った、ダングという男だった。

「何だ、知り合いか？」

カーザのその言葉に、カイはただ、頷いてみせた。

「今日は、お前に用はないんだ。」

そう言って、カーザの方に歩み寄るダングの肩をカイは掴んだ。

「あなたの『うつ』『用』っていうのは、あんまり良い予感がしないんだけどな。」

そのカイの言葉に、

「気のせいだろ？」

ダングは、カイの手を力強く握って応えた。

「カーザさん、あなたが保有している「例の物」を受け取りに来たんだが。」

そのダングの言葉に、カーザの表情が突然険しくなった。

「何だ、何かと思えば、あんたもアレが目的で来たのか・・・。悪いが、アレは誰にも渡せない。俺の切り札なんだよ。」

カイは、二人のやりとりを複雑な表情で見つめている。

「仕方ないな。」

そう言って、ダングは小さくため息を吐いた。

そして、懐から鋭い短刀を取り出した。

それを見ていたカイが、すかさずダングとカーザの間に入った。

しかし、ダングはそれを予測していたのか、ためらうことなくその短刀の刃を深々とカイの横腹に突きたてた。

ザクつという鈍い音の後、カイが表情を歪め、唸り声を出しながら、その場に落ち伏せた。

「カイツ！？」

カーザが慌てた表情で、倒れているカイの体を起こした。

「いいか、カーザ。こうなりたくなかつたら、さつさとアレを我々に渡すことだな。」

そして、

「いけねえー！キカの仕事を奪つちまつたじやねえか！」

ダングは、何か思い出したような表情を浮かべて、うなだれた。

それを見ていたカイは、

「ダング。こんなんで、俺を殺せたと思つなよ。」

と、苦痛に顔を歪ませながら言った。

するとダングは、一度鼻で笑つた後、

「負け犬が吠えてるよつにしか見えないぜ、カイ。」

と吐き捨て、憎たらしい笑顔でその場を去つて行つた。

こんにちは。作者のHORIEです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

ダングの姿が見えなくなると、カイは今まで苦しそうに悶えていた様子とは一変、いきなり腹に短刀を刺したまま立ち上がった。

「いやあ。今の、会心の演技だったと思わねえか？」

カイは、深く刺さった短刀を勢い良く抜くと、その短刀を眺めながら言った。

その光景に、カーザは啞然としている。

「あれ？ カーザ、どうかしたのか？」

「…………俺、まさかお前が演技してるのは思わず、お前が本当は不老不死じゃなかつたんじゃないのかと思って、本気でうろたえてた……。」

カーザが間の抜けた表情で言った。

「だから、さつき言つただろう？ 今まで関わった人間には、不老不死だつてことを気付かれなによつて配慮してるので。」

そのカイの言葉に、カーザは笑わないではいられなかつた。

「それより、ダングが言つてた「例の物」って、何のことだ？」

カイが、自分の腹から抜き取つた短刀を、手の上でクルクルと回しながら訊ねた。

「…………、悪いが、今は答えられない……。

「

結局、カイとカーザとの間には重い沈黙が立ち込め、そのまま夜が更けていった。

「自分は不老不死になつたんだ」カイがそう気付いたのは、不死鳥の鮮血を浴びた直後だった。

その後の行動は実に無謀で、普通なら命を失つていただろうことを、当たり前のようになっていた。

無数の銃弾の雨を浴びてみたり、剣で滅多切りにされてみたり。

血は出ないが、それなりの痛みは伴つことも知つた。

そんな無茶をし続けること37年の後、カイは運命の出会いを果たした。

その日カイは、ライク国の方に面した海岸にいた。

ふと田を向けた先には、2~3才ほどの女の子の手を引く女性が、砂浜を歩いていた。

黒い長い髪が海風になびき、海面に反射した光を浴びて、光り輝いて見えた。

しかし、何を思ったのか、その女性は女の子の手を引いたまま、海上に向かって行った。

海水浴を楽しむような姿ではないし、何よりその田は極寒の冬の田。どうせえても、それは普通ではない行動だった。

カイは、急いでその女性と女の子のもとへと駆け寄った。

「おこー!ー何してんだよー!ー?」

カイは叫んだ。

しかし、その声を聞いた途端、女性はさらに深みへと進んで行った。一緒に連れている女の子は、大声で泣き叫びながら、女性に手を引かれている。

「よせー!ー何考えてんだー!ー?」

カイは、海にバシャバシャと走り入ると、勢い良く女性と女の子の手を自分の方へと引き寄せた。

すると、

「離してくださいーー！私はもう、死ぬしかないのーー！」

女性は必死な形相で、瞳にたくさんの涙を浮かべながら、カイに怒鳴るように言った。

「何言つてんだよーー！こんな小さい子を道連れにするつもりかよーー？」

カイの手を振り払おうとする女性の両腕を、カイは力強く掴んだ。

「何があつたかは知らねえけど、大事な子ども命を奪つてまで死ぬことが、そんなに幸せなことなのか！？大事な子どもと生きるこの方が、あんたにとつて幸せなことなんじゃねえのか！？」

カイは一度も女性の目から目を離さなかつた。

二人の荒い息の音と、さざ波の音が混ざり合つ。

その傍らでは、女の子が泣き叫んでいた。

女性の瞳から、一気に涙がこぼれ落ちると、その膝も砕けたかのように、その場に崩れ落ちた。

カイは、女性と女の子を砂浜まで、優しく運んだ。

カイは砂浜に一人を座らせると、着ていたコートを一人の肩に掛けた。

泣いていた女の子の様子は落ち着き、女性は涙を拭つて女の子の肩

を強く抱きしめた。

「…………、もう、バカなことは考えません……。この子を護ることだけを考えて生きていきます。」

女性は、震える唇を噛み締めた。

「そっか。それを聞けて安心したよ。」

そう言って、カイは口元に笑みを浮かべた。

そして、カイは静かにその場を離れよつとした。

すると、

「あの…………お名前だけでも……。」

女性は、少しばかんだけのような表情でカイを呼び止めた。

「カイ。それが、俺の名前だよ。」

「私は、エイミと聞こます。この子は、ルミです。…………、
…………、ありがとうございました。」

エイミは、深々とカイに頭を下した。

その瞳からは光るもののが一つ落ち、その声は心なしか震えていた。

それから数日後、カイはライク国の中でも、エイミとルミを見か

ける。

しかし声を掛けることはしなかった。

その一人の横に、長身の男がいたからだ。

カイはいつしか、その町で、エイミーとルミに会える瞬間を探すようになつた。

エイミーも、カイが町のはずれにある林の中にあることを知り、ルミと一緒に林を訪れるようになった。

ルミはカイによく懐き、エイミーもカイの前では笑顔が絶えなかつた。

そんなある日、カイはエイミーの実状を知る。

エイミーの夫は町で有名な地主で、ルミと共に何不自由ない暮らしをしていること。

夫は女癖が悪く、その周りには愛人が複数存在すること。

夫は気に入らないことがあると、エイミーやルミに暴力をふるうこと。
そんなことを、エイミーは話してくれたのだ。

「そんな男となんて、さつやとおせらばしたほうが、いいんじゃないのか？」

そんな話を聞いて、カイの反応は当然そつなかつた。

しかし、

「それができれば、今頃そうしているわ・・・。前に一度離婚をお願いしたとき、銃を向けられたの・・・。殺されると思ったわ・・・。」

エイミは、怯えた様子で応えた。

「・・・・。もう少し早く、あなたと出合っていたら・・・。」

エイミが呟くように言った。

微かな沈黙の後、

「俺が何とかする。だから、ルミを連れてあの男のもとを離れるんだ！」

カイが、力強い眼差しでエイミを一直線に見つめて言った。

その言葉に少しためらつたエイミだったが、その言葉を信じようと、大きく頷いた。

しかし、それがカイの運命の歯車を狂わせる結果にならうとは、その時のカイもエイミも気付いていなかつた。

エイミはカイに言われた通り、夫のいない間に、ルミを連れていつもの林にやつて來た。

しかし、その行動に田舎とく氣付いたエイミの夫は、迷わず家から銃を持ち出し、カイとエイミ、ルミのいる林へと現れた。

「貴様だな！？エイミをたぶらかしてゐる小僧は！！」

エイミの夫の第一声は、それだった。

その表情も険しく、まるで悪人だった。

エイミは、やはり夫から逃れることはできないのだと、怯えた様子で、

「カイ、逃げて！やつぱり無理なのよ！」

ルミは、エイミの足にしがみ付いている。

「大丈夫、何とかなる！」

そう言って、カイはエイミとルミの前に立つた。

「何をコソコソ話してんだ！？胸くそ悪い奴らめ！」

エイミの夫は持っていた拳銃を構えた。

エイミはますます動搖する。

「カイ、やつぱりダメよ！諦めましょ！」

エイミが、カイの背後からそう叫んだ瞬間だった。

バーン！バーン！…という銃撃音が林の中に響き渡った。

無数の鳥が一斉に飛び立ち、その勢いで木々が大きく揺れた。

エイミの夫が撃つた銃弾は、確かにカイの体を貫いていった。

もちろん、カイがそれで死ぬはずはなかつた。

しかし、エイミの夫はカイを撃つことに満足して、その場を足早に離れていった。

カイは、しめたとばかりの笑みを浮かべて、背後のエイミの方を振り返る。

しかし、そこにエイミがいない。

下を見ると、果然と立ち戻りしたルミと、その場に倒れこんで動かないエイミの姿があつた。

カイは、驚愕の現状にかれるほどの声で叫びを上げていた。

カイは勢い良く起き上がつた。

どうやら、過去の夢を見ていたようだ。

その全身には大量の汗が光っていた。

カーザの部屋を後にした後、カイはサガミと一人でシオンの港に面した小さな宿で、就寝していたのだった。

窓の外には、まだ丸く大きな月が不気味に見えていた。

こんばんは。作者のHORIEです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

再び同じ夢を見ることを恐れたカイは、宿から出て静かに波打つ港へと来ていた。

「久しぶりに見たな・・・。」

カイは、穏やかではあるが、どこか切ない瞳で遠くを見ながら、ボソリと呟いた。

エイミと出会い、別れたのは今から77年前の出来事だった。

カイは間違いなくエイミを愛していた。

しかし、彼女を助けることも諷ることもできなかつた。

しかも、彼女の娘のルミには、田の前で父親が母親を殺す瞬間を見せてしまつた。

カイにとつてあの出来事は、悪夢以外の何ものでもなかつた。

しかし、しばらく記憶の片隅で眠つていたその過去が夢に出てくるというのには、何か意味があるのかもしれない、カイは微かに感じていた。

月光の下、独り港にたたずむカイの瞳は、心なしか涙で潤つていた。

夜が明け、新たな朝がシオンに訪れた。

カイは、一晩中港にいた。

相変わらず遠くの海を眺めていたカイだが、おもむろにズボンのポケットから写真を取り出した。

それは、テグスターのバーでダングから受け取った写真だ。

深いため息の後、カイはその写真に目を向けた。

そこには、サガミの姿が写されていた。

カイは、その写真を強く握り締めると、それを再びポケットにしまった。

宿に姿のないカイを心配したサガミは、港までカイを探しに来ていた。

港で座り込むカイを見つけたサガミは、背後から肩を叩いた。

「カイ、何してんの？」

その声に、カイがゆづくりと振り返った。

「…………え……？」

その顔は、明らかに寝不足であることを表していた。

サガミは、心配していたはずだったが、なぜかそのカイの顔を見て笑いがこみ上げた。

「カイ、すごい顔だね……！」

笑いをこらえているサガミを見て、カイは眠い目をこすった。

「私、これから父さんに会いに行つて、カーザさんと今後のこと話し合つてくれるね。」

「そつか。行つてらっしゃい。」

カイが、寝ぼけた顔で笑つた。

サガミが元気にその場を離れていく後姿を見て、カイは内心ホッとしていた。

出会つたばかりのサガミは、どこか張り詰めていて、父親をさらわれた時には、その張り詰めた様子は一層悪化していた。

しかし、父親の無事を確認し、その容態も良い方向に向いているとを感じたサガミの様子は、多少和らいだように見えていた。

だからと黙つて、現状に安心ばかりはしていられない。

前日にカイとサガミに銃弾を浴びせた人物が誰なのかも定かではないし、カーザとダングの間で交わされた会話の中にあつた、「例の物」とは一体何なのかも明らかではない。

まるで謎が謎を呼んでいるようだつた。

色々と思考を巡らせていたカイだが、さすがに疲れを感じ、宿に戻りうつと立ち上がつた。

すると、

「カイ・・・？」

背後から声がした。

そちらを振り返ると、

「ミキカ・・・!?

暗い表情でカイを見つめるミキカの姿があつた。

「どうしたんだよ? こんな所で。」

そのカイの質問に、ミキカはただうつむくだけだった。

サガミは、カイと別れた後、カーザのもとを訪れていた。

「お父さんの容態は、いたって順調に回復しているよ。もうしばらくここで療養していれば、普通に生活するのに何不自由ない状態まで回復するはずだよ。」

カーザのその言葉に、サガミの表情が綻ぶ。

「あの・・・、でも・・・。」

サガミが少しまじついた。

すると、

「？もしかして、お金のこと？それなら心配しなくて良いよ。色々事情がありそうだし、別に金儲けしようって気もないしね。」

カーザが穏やかな笑顔で言った。

サガミは、カーザの優しさに感謝しつつ胸を撫で下ろした。

「あ！ そうだ。これ・・・、カーザさんに見せるよ！ こって、受け取つてたんですね。」

そつと置いて、サガミはキカから受け取つていた、シルバーの星の飾りがついたネックレスを、ポケットから取り出した。

すると、カーザはそれを受け取り、

「キリも、リキカの知り合いなんだね？」

穏やかに懐かしむような笑みと、微かに切なさを感じているような表情を浮かべながら、そのネックレスを眺めている。

「これ、俺が預かっちゃつていいかな？」

そのカーザのいきなりの問いに、

「あ、はい！」

と、サガミはとつとめに頷いた。

「リキカは、まだレイイザーの連中に従つてるのかな？」

カーザが、問い合わせの独り言なのか区別しづらい呟くような言い方で、言った。

そのカーザの言葉の意味が、サガミには分からなかつた。

サガミは首をかしげている。

そのサガミの様子を見て、カーザは明らかにしまつたといつのような表情を浮かべた。

「レイイザーって、何ですか・・・？」

サガミは田代とくそのカーザの動揺を見抜き、訊ね返した。

「いや、何でもないんだよ！知らないなら、いいんだ。」

カーザが素早くその場を離れていった。

港で再会したカイとミキカは、シオンの町中にあるレストランに来ていた。

「店は、大丈夫なのか？」

カイがメニューを見ながら言った。

「ええ。」

ミキカが、レストランの従業員が持つてきた水を、少し口に含んだ。

「俺まだ朝飯食つてないんだよね。ミキカは何か食つか？って言つても、おじらないぞ。」

そう言って、カイは笑顔でミキカにメニューを差し出した。

「私はいいわ。」

ミキカの目は、会つてから一度もカイの顔を見ていない。

「そつか。じゃあ、俺はシーフードグラタンにしようつと。」

そして、カイが楽しそうに従業員に注文した。

相変わらずつむいでいるミキカを見たカイは、

「何だよ？朝からグラタンかよ！？って、思ってんのか？」

と、これもまた楽しそうに言つた。

しかし、そのミキカの心境の的を見事に外したカイの言葉に、ミキカは深く大きなため息を吐いて見せた。

「何も分かつてないのね・・・。」

「何が？」

カイが、自分の手元にあつた水を一気に飲み干した。

「今、自分が置かれている状況をよ。」

「ミキカ、・・・・何か暗いぞ、お前。」

「ちやかさないで！！」

ミキカが、両手でテーブルを殴つて怒鳴つた。

その勢いで、ミキカの手元にあつた水の入つたグラスが揺れた。

「何、怒つてんだよ？俺が置かれてる状況つて、何の話だよ？」

「…………ダングが、私に指令を出したわ……。」

カイの表情が、一瞬にして硬くなつた。

「あなたを殺すこと。それが、ダングが私に与えた指令よ……。」

レストランの従業員が、カイのもとにシーフードグラタンを運んできた。

湯気が元気良く立ち込めている。

「…………そもそも、私なんかに関わったのが、運の尽きだつたわね、カイ……。私は、私自身のためにも、指令を無視するわけにはいかない。だから、次に会つた時は私はあなたを……、殺すから……。」

そう言い残したミキカは立ち上がり、姿をひるがえし、その場を静かに去つて行つた。

No.12 シオノギト（後書き）

いとこちば。作者のつ○エニイです。お読み頂きましてありがとうございます。今後もよろしくお願い致します。

カイは考えていた。

昨夜、なぜ過去の夢を見たのかが、何となく分かった気がしていたのだ。

カイが、ミキカと出会ったのは今から2年前のこと。

それは、偶然という言葉だけでは言い表せないような出来事だった。

エイミの死後、カイは激しい自暴自棄に陥っていた。

エイミを救えなかつた自分。

エイミを護れなかつた自分。

エイミとルミを不幸に落とし入れてしまつた自分。

カイは、そんな全ての自分が許せなかつた。

思いつめ、追い込まれたカイは、いつしか「死ぬ」ことを考え始めた。

しかし、不死の体となつたカイが「死ぬ」ことなどできない。

もはやカイにとつて、「死」とは無謀な願いであり、けして叶うことのない希望なのだ。

その時に、カイは初めて知ることとなる。

偶然に手に入れたこの不老不死の体は、今となつて考えてみれば、カイにとつては、未恐ろしい「呪い」に過ぎず、けして幸せなことではないということを・・・。

そう、不死鳥は自分の体を傷つけた者に対して、不老不死という能力を与えていたのではなく、不老不死という過酷な呪いを浴びていたのだ。

カイはそんな事に、エイミを失つて初めて気付いたのだった。

「死」を考え始めたカイは、不老不死の人間が死ぬ方法を探り始めた。

数え切れない程の文献を読みあさり、あらゆる土地にいる不死鳥の情報通を訪ね、気が付けば、エイミと死別してから早くも75年の時が過ぎていた。

しかし、「死ぬ方法」の、確かな情報は得られず、ただ時間だけが過ぎていった。

その間に唯一知ったのは、「不死鳥の鮮血には不老不死の能力があるが、不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血には、「死」の能力が宿る」ということだった。

カイはそれが、もしかしたら自分にとつて唯一の、「死ぬ手段」なのかもしれないと考えた。

しかし、不死鳥を探すことはそう生易しいことではない。

ましてや、その血を採取することなど、困難に近い。

カイは、途方に暮れた。

そして気が付くと、カイはヒヤミとハミと初めて会った海に来ていた。

あるいは、この広い大きな海に漂うこと、「死」というものに出会えるかもしないと、カイは密かに願っていたのかもしれない。

この日も、凍てつく風が吹き荒れる、極寒の冬の日だった。

砂浜を、無意識に進んでいると、カイは思わず光景を目にする。

黒い長い髪を海風に撫でられながら、海を眺める女性が砂浜にボツンと独り立っていたのだ。

カイは、息の止まる思いがした。

「…………エイミ…………？」

かすれた声で、カイは呟いた。

そして、一目散にその女性の方へと走った。

しかし、女性はカイが予想もしていなかつた行動に出た。

女性は、大きく深呼吸すると、しつかりとした足取りで、海へと入つていったのだ。

カイは、田を疑つた。

夢を見ているのか？過去の幻想を見ているのか？そんなことを考えながらも、カイはその女性の腕を力いっぱい引き寄せた。

驚いて振り返った女性は、エイミだった。

「エイミ・・・!？」

驚愕の声を上げるカイに、

「何なの！？邪魔しないでよ…！」

そのエイミと思わしき女性は、力強く怒鳴ると、カイの手を振り払つた。

しかし、カイは自分でも驚くほど素早く、その女性の腕を再び掴むと、砂浜へと連れ戻した。

「邪魔しないでって言ってんでしょう！？何なのよ！？私は、ここで自分の人生にピリオドをうつとしてるのに、何で邪魔するのよ！？」

その、叫びのような怒鳴りを上げるその女性を、カイはただ見つめていた。

すると、そのカイに少し女性がたじろぐ。

「な、何…？」

「キ//、・・・・・・・・名前は・・・?」

そのカイの質問に、女性は素直に答える。

「名前・・・・?・・・・・・・・//キカだけど・・・。」

そう、それはミキカだつた。

それが、カイと//キカの出会いだつた。

しかし、ミキカはエイミと見間違づばかりこそつくりで、カイは言葉に詰まつた。

「私の邪魔をしといて、だんまりとは、ビリコウ神経してんのよ・・・!?」

ミキカは確かに、エイミと比べると性格的な面で異なる部分が見られるが、カイは瞬時に悟る。

ミキカは、「エイミの再来」だと。

エイミを救い、護れなかつた報いを、償うチャンスが舞い降りたのだと。

「俺の名は、カイ。・・・・・・・・、キミの力になりたいんだ。」

そのカイの言葉に、ミキカは不審な表情を浮かべた。

「たつた今会つたばかりの私に力を貸そつて、のは、一体ビリ

いうボランティア精神なわけ……？はい、そうですか。って、いきなり信用しろっていうほうが、おかしいと思うけど……。」

そのミキカの意見は正論だつた。

カイの事情を知らないのだから、そう考えるのが普通である。

すると、そこへ一人の男が姿を現す。

「ミキカ、こんな所で何してんだ？」

「…………！ダング……。」

ミキカが、ダングを見て身構えた。

「まさか、逃げようとか考えたりしてねえよな？」

ダングが、そう言いながら懐から短刀を取り出した。

「逃げる？私が……？何で、逃げなきゃいけないのよ……。」

強気な発言をしているミキカだが、その唇は微かに震えていた。

「いや、良いんだぜ逃げても。そのかわり、お前の命もお前の兄貴の命も、なくなるものと考えてもらわないとな。」

「……カーザは、関係ないでしょ……？」

ミキカが、すごい剣幕で怒鳴つた。

ダングは、短刀を回転させながら高々と上に向かつて投げた。

そして、それを即座にキャッチすると、ミキカに向かつてその刃を走らせてきた。

しかし、その攻撃をカイが素早く食い止めた。

短刀を持つダングの手を掴むカイの手は、力強い。

「何だ、てめえは・・・? 手を離せ・・・。」

ダングの両つきが、一層険しくなる。

「悪いけど、この手は離せない。俺には、あんたがミキカを殺そうとしているよう、見えるからね。」

カイが、鋭い両つきでダングをにらんだ。

ミキカが、少しうつむいたえた様子で一人のやりとりを見つめている。

しばらくカイとダングは、にらみ合っていた。

そして、沈黙を破るようになにダングがフツと鼻で笑い、

「まあ、いい。今回は大目に見てやるか・・・。」

もう片方の手でカイの手を自分の手から引けると、短刀を懷にしまい、足早に去つて行つた。

こんばんは。作者のJOHNEYです。だいぶ、場面が転々としていますが、「追憶」しているというがけつひとつ重要な部分なので、見放さずにお読み頂けたら幸いです（汗）

ダングが立ち去った後、ミキカは大きく息を吐いた。

「・・・、ありがとう。助かったわ・・・。」

ミキカが、微かに笑みを浮かべながらカイに言つた。

「いや、いいんだよ。・・・。当然のことをしたまでだから。」

その言葉を聞いて、ミキカが優しく微笑んだ。

「何か、困つてることがありそうだな?」

そのカイの問いに、ミキカは一時の間の後、自分のこと話を話し出した。

ミキカの母親は、裏社会で名を馳せている、「イレイザー」という殺し屋一味の頭の、孫としてこの世に生を受けた。

当然、ミキカの母親はその家業とも言つべき仕事に就くことが強いられていたが、残酷な殺し屋などにはなりたくないといつ気持ちから、幼い時に早くも家を飛び出したのだといつ。

それからしばらくは、イレイザーの人間から逃れ、それなりに平穏無事に暮らし、やがて子どもを一人儲けた。

それが、ミキカと、その兄のカーザであった。

しかし、ミキカが12歳の時に、両親は亡くなり、兄妹一人で肩を寄せ合つて細々と暮らしていた。

そして、ミキカが15歳の時に、イレイザーの人間に所在を掴まれ、ミキカだけが連れ戻されてしまった。

その時のカーザは、当時暮らしていた所の近くの診療所で医学を学び、医者としての才能を開花させようとしている時だつた。

カーザに医学を教えたその診療所の医師が彼を護つたから、カーザはイレイザーに引き戻されなかつた、というのもあるが、実際は、彼が何やら「切り札」を握つていたおかげで、連れ戻されなかつたようだ。

しかし、イレイザーの連中の考えることは汚く、ミキカには、「カーザの命を奪わなければ、おとなしくイレイザーに従え。」と告げ、カーザにも、何か脅しをかけていたようで、やがてミキカにもその所在が掴めないようになつた。

ミキカは、もし自分が従わなければ、いくら切り札を握るカーザであつても、イレイザーならいとも簡単にその命を奪い、けして脅しなどではないのだと、自分に見せしめるだらうことは、よく分かつていた。

だから、ミキカはイレイザーに従い、他人の命を奪う残酷な行為を

やうやく得ない状況に置かれていた。

しかし、「殺し屋」としての時間を重ねていくうちに、ミキカの善良な精神は麻痺していった。

他人を「殺す」という行為が、今のミキカには至極自然な行為になりつつあつたのだ。

そんな自分が、ミキカは恐ろしかつた。

いつそ、いなくなりたいと考えた。

しかし、それすら許されないのだろうかと、ミキカは絶望している。

カイは、ミキカが望むことを叶えてやりたい気持ちがあつた。

しかし、「死」以外に、このミキカが望むものが何なのか、分からなかつた。

そして、カイは、口にする。

「俺は、力になれることは、あるか・・・?」

そのカイの質問に、ミキカは、

「・・・・・・・じゃあ、私の代わりに殺し屋になつて・・・。私の力になるつてことは、そういうことなのよ・・・。私に力を貸そうなんて、到底無理だつてことが分かつたでしょう・・・?」

と、うつむき、目を閉じ、しかし、微かに口元だけを笑わせて答え

た。

その言葉にカイが応える前に、ミキカはその場を静かに離れようとしました。

しかし、カイがミキカに応える。

「分かった。力を貸すよ。」

ミキカは、何も応えなかつた。

何故、今になつてエイミとの過去を夢に見たのか。

カイは、「エイミを救えなかつた」。

そして結局、「ミキカも救えなかつた」。

だから、カイの中で結論は、こつなつた。

死してなお、「エイミは、自分を怨んでいる」。

エイミへの償いになればと、ミキカに加担したが、それは根本的に間違つていて、そもそも、ミキカが言つたように、自分の行いは単

なる「偽善」に過ぎず、そんなことで自分が許されるはずもなかつたのだと、カイは自分なりに悟つた。

本当は、「のまま苦しみ生きる」とが、「イミやルミへの償いにな

るのではないかと、カイは考える一方で、その恐怖さえ感じていた。

気が付けば、カイの目の前のシーフードグラタンは、すっかり冷め切り、先ほどまでの元気な湯気は見られなくなつていた。

No.14 追憶のページ（後書き）

こんばんは。作者のJOHNEYです。今回は少し短めです。今後
よろしくお願い致します。

サガミは、カーザの言った「イレイザー」というのが、無性に氣になつて仕方がなかつた。

それを、どこかで見たことがあるような気がしていたのだ。

しかし、それをどこで見たのかが、どうしても思い出せないでいた。

カーザのもとを後にし、サガミはシオンの町にある小さな図書館を訪れた。

何か不死鳥に関する珍しい文献でもないかと、探しに来たのだ。

サガミは、ゆっくりと色々な本を見ていくと、幼い頃に読んだ不死鳥研究の書物を見つけた。

懐かしく思い、それを無意識にパラパラとめくつていると、サガミはあるページでその手を止めた。

「これは……」

そこには、次のよつなことが記されていた。

「近年、裏社会ではイレイザーというコードネームの殺し屋一味が名を馳せているが、その頭のリュウという男は、どうやら不死鳥の鮮血に触れ、不老の力を得たという噂が密かにある。」

サガミは、何度も読み返した。

先ほど、カーザが口にした「イレイザー」というのは、この書物にある「イレイザー」と同一なのだろうかと、サガミは冷静に考え始めた。

しかし、もしさうであつたとしたら、カーザは気になることを言つていた。

「ミキカは、まだイレイザーの連中に従つてるのかな?」 という言葉だ。

「従つ」といふことは、サガミがテグスターのレストランで会つたミキカは、イレイザーつまり殺し屋であるということになる。

そして、そのミキカからいつも仕事を提供されているカイは、同様に殺し屋であるといつ結論に至る。

サガミは、しばらく呆然と一点を見つめていたが、何か思いついたよつて、図書館を走り去つた。

図書館を出たサガミは、カーザの部屋を手描して走つていた。

その途中で、サガミはカイとバッタリ出くわす。

サガミは立ち止まつた。

「あれ？ サガミ、 そんなに急いでどこ行くんだ？」

そのカイの言葉に、 サガミは特に応えるでもなく、 カイの方をにらみ付けると、

「私、 あんたを見損なつたかも・・・！」

とだけ言つと、 再び走り出した。

カイは、 どういう意味かも分からず、 その場に立ち尽くしていた。

サガミは、 カーザの部屋に着くと、 厳しい表情を浮かべながら、 カーザの目の前に立ちはだかつた。

「サガミちゃん、 どうしたの？」

カーザが、 何食わぬ顔をして言つた。

サガミは、大きく息を吸い込むと、

「カーザさん、・・・、さつきのイレイザーの話だけど・・・。」

表情の厳しさとは裏腹に、落ち着いた声で言った。

そのサガミの言葉に、カーザはぱつの悪そうな顔をした。

「もしかして、イレイザーって・・・。」

サガミの全てを見透かしているかのような真っ直ぐな瞳に、カーザはため息をついた。

「・・・、『もしかして』ってことは、何か心当たりがあるんだね・・・？」

サガミが、静かにうなずいた。

それを見たカーザは、

「さつきは、うかつだつたよ・・・。キミがミキカの知り合いだとしても、ミキカの素性まで知つてはいるとは限らないもんね・・・。秘密事を持つてはいるようじや、お父さんを預けるには不安だらうし、話せる範囲でキミにも話すよ。」

落ち着いた面持ちで言った。

そして、カーザはサガミに、自分のことや妹のミキカのことを話し出した。

レイイザーといふ殺し屋組織のこと。

自分たち兄妹がなぜ、そのような残酷な一味に関係しているかということ。

カーザは丁寧に、順を追つて話していった。

それを、サガミは真剣な表情で聞き、理解していく。

しかし、サガミはその中で、疑問に思う事柄があった。

「カイは、・・・レイイザーなんですか・・・？」

サガミのその質問に、カーザは複雑な表情で頷いた。

「カイは、俺とミキカが引き離された時、俺の所在を見つけ出して、レイイザーの連中には内緒で、ミキカと俺を再会させてくれたんだ。でも、その時には、すでにカイはレイイザーの一員だった・・・。なぜ、カイがレイイザーになつたのかは、俺にも分からぬけど、何か理由があつてのことだとは思つよ。」

サガミは、少し悩むような表情を浮かべた。

そして、

「カーザさんは、なぜレイイザーに連れ戻されずにすんだんですか？」

サガミが、もう一つの疑問を投げ掛けた。

しかし、カーザは先ほどまでとは打って変わって、口を開かなくなってしまった。

「何か、事情があつたんですか・・・？」

そのサガミの質問がカーザにされたのと同時に、カーザの部屋に複数人の男が押し入ってきた。

そして、その男たちは、サガミとカーザを取り押さえると、何も言わずに一人を連れ去つていった。

それと同時に、シオンの町を歩いていたミキカは、明らかに自分を待ち伏せしている様子のダングと遭遇した。

「何? ストーカー?」

ミキカが冷たい視線をダングに送った。

すると、ダングは含み笑いを浮かべると、

「だいぶ探し回ったからなあ、そう思われても仕方ないかもな。」

と、自分の田の前を歩き去るミキカを追いかけながら言った。

「それで、用件は何？」

ミキカはチラリともダングの方を見ずに言った。

「カイは、もう殺ったのか？」

そのダングの楽しそうな声に、ミキカは思わず立ち止まつた。

「せつせつ、レストランでお前とカイが、楽しそうにお食事してゐるのを見かけたぞ。」

チラシと見た先のダングの瞳が、明らかに色を変え、鋭くなつていることにミキカは気が付いた。

「…………、殺すつて、宣言しに行つただけよ。」

そのミキカの返答に、ダングは万遍の笑みを浮かべると、

「そりがー、そうだったか。じゃあ、丁度良かつた。お前のために絶好の場を『』えることができそうだ。」

と言つて、ダングは力強くミキカの腕を引っ張つて、歩き出した。

ミキカの表情に、微かに焦りの色が滲んだ。

走り去つたサガミが気になつたカイは、町中を探した後、カーザの部屋へと来ていた。

しかし、そこにはサガミも、カーザの姿さえもない。

いるのは、部屋の奥でぐつすりと眠つてゐるサガミの父親だけだつた。

しばらく部屋にいたカイは、次第に強烈な睡魔に襲われる。

段々と意識が遠のき、やがてその場で眠り込んでしまつた。

複数の男たちに連れ去られたサガミとカーザは、見知らぬ倉庫に連れ込まれた。

たくさんの荷物が置かれた、だだつ広いその倉庫では、抵抗するサガミとカーザの声が響いた。

しばらくすると、一人の男に引きずられて、ぐつたりとしたカイが倉庫に運び込まれた。

それを見たサガミが、

「カイ！？」

心配そうな表情で叫んだ。

しかし、

「大丈夫。きっと眠ってるか、気絶してるだけだよ。」

カーザがいたつて冷静な様子でサガミに応えた。

カイは、そのまま倉庫の奥にある柱に縛られた。

「ちょっと、あんたたち一体何者なのっ！？私たちをどうしようつて言つのつー？」

サガミが、すごい剣幕で怒鳴り散らした。

しかし、男たちは何も反応しない。

「何か応えろよっ！？」

そう叫んで、サガミは自分の腕を拘束している男目掛けて頭突きした。

男のカーザよりも激しく暴れているサガミに、カーザの腕を掴んでいた男が一人、サガミの方へと移つた。

それでも、サガミを完全には押さえつけられない。

そこへ、ダングとミキカが現れる。

「準備万端みたいだな。」

ダングが、笑顔で言つた。

「ミキカ！？」

カーザが、突然暴れ出した。

それを、男たちが殴つて止めようとする。

「ちょっと！やめなさい！」

ミキカがカーザのもとへ駆け寄り、男たちに怒鳴つた。

男たちが大人しく従つた。

「大丈夫、カーザ？」

そのミキカの言葉に、カーザは笑顔で頷いてみせた。

すると、ミキカの背後にダングが現れ、

「ミキカ、あれを見ろ。」

ダングが、倉庫の奥を指差した。

そこには、柱に縛り付けられてぐつたりとしているカイの姿があった。

ミキカの表情が固まる。

ダングは、ミキカの背中を押した。

ミキカは、力無くフラつとカイの方に一步近づいた。

「お前の、カイへの宣言を果たす時だぞ。さあ、殺れ。」

そう言つて、ダングはミキカの手に拳銃を握らせた。

しかし、ミキカはその拳銃を構えようとしない。

「どうしたミキカ。早くやれよ。」

ミキカが唇を噛み締めた。

「…………で……かない……。」

「ん!?」

ダングが、嫌味な聞き返し方をした。

「できないっ！！」

ミキ力が、叫びのよくな声を上げた。

「分かった。決心を固めてやる。」

そう言って、ダングは懐から拳銃を取り出し、その銃口をカーザのこめかみに当てた。

それを見たミキ力の表情が、歪む。

「お前がカイを撃てば、カーザは助かる。お前がカイを撃たなければ、カーザは死ぬ。簡単で分かり易いだろ？！」

そのダングの卑劣な行動に、

「なんて、卑怯な奴！！全然、状況は飲み込めないけど、ミキ力さんがどちらも選べないのは、分かつてるだろ？！？！」

サガミが、食いかかるような勢いでダングに怒鳴った。

するとダングは、

「状況が飲み込めないなら、口を挟むな。」

背筋がゾクゾクするほど凍てつく瞳で、サガミをにらみつけ言った。

ミキ力が、静かに銃口をカイに向けた。

その手は震えている。

「ミキカさん！？」

サガミが、叫んだ。

「いいぞ、ミキカ。」

ダングが、ミキカの耳元で囁いた。

一瞬の沈黙の後、

「ミキカ！ 撃て！」

カーザの声が倉庫内に響き渡った。

ミキカが、驚きの表情を浮かべながら、カーザを振り返った。

「大丈夫だから、撃て！」

カーザは、叫び続けた。

しかし、

「カーザ、あんた何言つてるの・・・！？」

ミキカが、青ざめた顔で言った。

するとダングは、

「はははははははっ！…！」

腹を抱えて笑い出す。

「ミキカ、お前の兄貴はどうやら命乞いしているようだぞ…自分が助かりたいがために、カイを犠牲にしようと、潔い判断だ！歯切れが良くていい！」

しかし、そんなダングの笑い声など気に留めることなく、カーザはミキカに叫び続ける。

「お前が撃てば、何とかなる…とにかく、撃つんだ！…」

ミキカは、明らかに動搖し始めた。

その息は荒くなり、手元にまで汗が光っている。

「カーザさん、正気！…どうしちゃったの！…？」

唖然としていたサガミが、カーザに叫ぶ。

しかし、カーザはそれすら耳に入れようとしない。

「俺の言ひ方とを信じろ…ミキカ！」

しかし、そのカーザの叫びを、ミキカは聞き入れようとしていない。

痺れをきらしたカーザは、自分を拘束していた数人の男たちの腕を振り払うと、ミキカの震える手から拳銃を奪い、バーン！…・・・

倉庫内にその音はこだました。

カーザが放つた銃弾は、カイの眉間に見事に捉えていた。

その光景を目にしたミキカが、腰を抜かしたように、その場に座り込んだ。

サガミも、驚きのあまり、身動きがとれない。

しかし、

「カーザ。見直したぞ。お前がまさか、こんな躊躇なくカイを撃ち抜くとは、思ってなかつたな。」

ダングだけは、驚いた様子に笑みを浮かべながら、カーザの肩を叩いた。

「後の処理は、俺がやる。」

カーザのその言葉に、ダングは「任せたぞ」とカーザの肩をポンポンと叩くと、男たちを従えて倉庫を後にした。

No.15 撃て（後書き）

こんばんは。作者のHORIEです。お読み頂きまして、ありがとうございます。今後もどうぞよろしくお願い致します。

座り込んでいたミキカが、勢い良く立ち上ると、カーザの方へと歩み寄り、その頬を平手で一発強打した。カーザが、痛そうに頬を撫でる。

ミキカは、瞳に溢れ出した涙と、こみ上げる思いを抑えきれずに、顔を両手で覆つた。

サガミも、先ほどまでの元気はなく、ただ呆然としている。

「二人も、カイの縄ほどくの手伝ってくれよ！」

何もなかつたような素振りで言った。

そして、

「カイ！…お前も、いつまでそうしてるつもりだよ！？そりやつて紛らわしこ」としてるから、俺が悪者扱いされんだろ？が…」

カーザは何を思つたのか、ぐつたりとするカイの頭を殴りつけた。

す
る
と、

「いつてえなあ・・・。もう、済んだのか・・・？」

頭をガシガシと搔きながら、カイが大あくびした。

ミキカも、サガミも、目が点になる。

「ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、ビ、？」

サガミが、半分笑い、半分怯えたような表情で言つた。

「カイ、・・・防弾チョッキでも着てたの・・・？」

ミキカが、カイのもとに駆け寄り、不可思議な状況に混乱した様子で訊ねた。

「撃たれたのは、頭なんんですけど。」

傍らからカーザが言つた。

「じゃあ、何で生きてるのよつー？」

ミキカが、脇から口を挟んだカーザに怒鳴つた。

「どうしたことなのか、しつかり説明して。これじゃまるで、カイは・・・」

ミキカのその真剣で重々しい声に乗つかるように、

「・・・不老不死・・・、・・・不死鳥・・・・・・・？」

サガミが、呟くよつた声で言った。

それに、ミキカが反応する。

「カイ、…………そつなの……？」

複雑な表情で見つめるミキカに、カイは悲しげな笑顔で一度頷いた。すると、サガミが突然勢い良くカイのもとへ駆け寄り、カイに掴みかかった。

そして、

「不死鳥の鮮血を浴びたのつ！？」

すごい形相でサガミは、カイに訊ねた。

それにも、カイは驚くでもなく、ただ悲しげな表情で頷いた。

その瞬間に、サガミは思い切りの良い右ストレートをカイにお見舞いした。

それを見ていたカーザが、次の一打に備えて振りかぶったサガミを取り押された。

ミキカは、突然の出来事に啞然としている。

「やつぱり、見損なつた！ 罪の無い他人の命を平氣で奪える上に、自らの欲のために貴重な不死鳥の体を傷つけて鮮血を奪うなんて、最低だつ！！」

カーザに止められたサガミが、今にもカイに飛び掛りそうな勢いで怒鳴った。

しかし、殴られたカイは、反論も反撃もせずに、ただうつむいていた。

そして、サガミはカーザの腕を振り切ると、そのまま一目散に倉庫を走って出て行つた。

「サガミちゃんは、…………男勝りビシリじゃないな…………」

カーザが、呆れた様子で一言もらした。

すると、

「何で…………あいつ、俺が殺し屋だって知つてんだろ？…………？」

うつむいていたカイが、小さなかすれた声で言つた。

「悪いっ！……俺があの子にしゃべったんだ……！」

カーザが両手を合わせてカイに頭を下げた。

「そつか…………」

と一言だけ言つて、カイも倉庫を重い足取りで後にした。

カイは、倉庫を後にした後、シオンの船着場とは間逆の方向にある、人気の無い崖壁に来ていた。

ただその先に広がる広大な海を眺めていれば、自分の中の汚れた部分が浄化されていくとしたら、どんなに楽だろうとカイは考えた。

崖壁に座り込み、背中を丸めているカイを、ミキカが見つける。

ミキカは、カイに静かに歩み寄った。

「どうして、話してくれなかつたの……？」

そのミキカの柔らかな声に、ひどく意氣消沈しているカイが振り返る。

「私、別に恐くないわよ。カイが不老不死だろうと、怪物だろうと。これでも私は、見返りも期待せずに協力してくれたカイに、一応感謝してるの……。」

そう言って、ミキカはカイの隣に座った。

「でもこれで、何故カイが突然イレイザーを抜けるって言い出したのか、分かつたような気がするわ……。これ以上私たちと一緒にいたら、自分が不老不死であることがばれてしまうからでしょう……。

・？

そのミキカの問いに、カイは遠くの海を眺めながら、力なく頷いた。

「俺は・・・・・」

ずっと黙っていたカイが、口を開く。

「お前に、謝らなければならないことがあるんだ・・・。」

「謝る？何を・・・？」

ミキカが、身を乗り出した。

「俺は、お前やカーザやサガミの曾祖父母より、さらに昔の年代に生まれた。今年で133才になる。」

静かに語り始めたカイに、ミキカは真剣な表情で耳を傾ける。

その近くにある木の陰には、思わずカイを殴りつけたことに少し後悔しているサガミがいる。

「不死鳥の不老不死の能力なんて、初めから興味なかつた。ただ、その姿を一目見たいと思つたんだ。それだけだつた。でも、不死鳥は思つたより気性が荒くて、俺を突然襲つてきた。傷つける気なんてなかつたんだ・・・。でも、仕方なかつた。そうしてなかつたら、今頃俺は冷たい土の中だ。」

カイが一度、小さく息を吐いた。

「不老不死になつてから数十年後、俺はある女性と出会つた。その名はエイミ。暴力的な夫に悩まされていて、自殺をしようとしていた。」

ミキカが、少し考え込む様子になつた。

「エイミは、ルミとつよい娘がいて、・・・」

そのカイの言葉をミキカが遮る。

「ちょっと待つて！」

カイが話すのを止めた。

「ルミ・・・。今そう言つたわよね・・・？」

カイは、小さく頷いた。

「私の祖母の名前もルミつていうんだけど・・・。それは、関係ある・・・？」

カイは、少し考えた後、再び小さく頷いた。

そして、

「お前に初めて会つた時、目を疑つたよ。エイミが再来したのかと思つた。しかも、かつてのエイミと同様、海で自殺しようとしてた。・・・。その時は他人の空似かとも考えたけど、お祖母さんの名前がルミつていうなら、きっとエイミはお前の曾祖母だったんだな・・・。」

ミキカの瞳から涙を離さずにカイは言った。

「俺はかつて、エイミとルミを救おうとして、結局最悪の事態に落とし入れてしまったんだ……。だから、目の前で救いを求めているお前を救えば、エイミたちへの償いになるんじゃないかと、勝手に思い込んでた……。でも、実際はエイミたちを救えなかつたようだ、お前のことも救うことができなかつた……。結局、俺の工房に過ぎなかつたんだ……。俺は、お前を救おうと考える反対側で、実は自分がエイミたちへの罪から逃れる方法を探していたんだ……。」

カイは、頭を抱えた。

そして、何もしゃべらなくなつた。

「カイ…………。私は、救われなかつたなんて思わないわ…………。私の曾祖母であるエイミへの償いに、私を救おうと考えたつていふのは、…………まあ、…………正直…………、ショックな部分もあるけど…………。でも、唯一の肉親であるカーザと離れ離れに暮らしていふ中で、私の心のより所は、間違いなくカイ、あなただつたから…………。」

ミキカは、カイの横顔を見つめた。

「イレイザーに無理矢理従わされて苦しんでいた私に、方法はどうであれ、力を貸してくれたカイに感謝してるわ。それに、私はもう誰かに救つてもらわなくても、大丈夫。…………充分よ…………ありがとう。」

そう言って、ミキカはどこか悲しげな笑みを浮かべながら、カイのもとを離れて行つた。

ミキカが最後に言つた「ありがとう」は、カイにとつては「さよなら」の意味に聞こえた。

ミキカの心が完全にカイのもとを離れていった。

そんな気がしたからだ。

今のかいの頭の中では、マイナスな方向にしか思考が向かなくなつていた。

更新が遅くなりまして、申し訳ありません。今後もよろしくお願い致します。

しばらくして、カイは立ち上がった。

カイが宿に戻るといい、歩き出すと、木の陰にたたずむサガミを見つける。

「サガミ。」

「あっ！……いや、……その……立ち聞きするつもりはなかつたんだけど……。」

サガミが、ぱつの悪そうな様子で苦笑いを浮かべた。

「あ、あのああ、……。わざ、思いつきり殴つたこと、ちよつと反省して……。……『ごめん……。』

サガミは、素直にカイに頭を下げた。

「謝る必要なんてないよ。サガミが怒つて当然のことだし……。」

カイの哀しみに満ちたような表情を見て、サガミが口を開く。

「せつや、//キカさんを「救えなかつた」ってカイ言つてたよね……？」

カイが、「ああ」と一言応えると、浅いため息をついた。

「私、それは間違つてるとと思つよ。」

カイは、サガミの濁りのない瞳を見つめた。

「・・・俺は、ミキカを救えなかつただけじゃないんだ・・・。結局、俺はミキカに苦しみまで与えてしまつた・・・。さつき、ミキカの言葉を聞いただろ？俺のことを、「心のより所」だつたつて・・・。その俺を殺す役目を、あいつに負わせてしまつた・・・。最悪のパターンだよ・・・。」

カイが、微かに口元に笑みを浮かべて言つた。

今まで見たことのない沈んだ様子のカイに、サガミが力強い眼差しを向けた。

「・・・、カイ。過去にカイが救えなかつたつていう女性とミキカさんでは、事情が違うよね？だつて、ミキカさんは今、生きてるんだよ？まだミキカさんが苦しんでいると思うなら、カイはミキカさんを救うことができるはずでしよう？・・・部外者の私が口を挟むのは、うつとうしいかもしれないけど・・・。ミキカさんを「救えなかつた」なんて言つのは、まだ早すぎると思つ。」

二人の間にサラサラと風邪が駆け抜けた。

一瞬、間ができた。

「カイ・・・、諦めないでよ。そんな顔しないでよ。私も協力するから。」

サガミの言葉を、カイは呆然とした様子で聞いていた。

「だつて私、カイに借りがあるでしょ？」

サガミは、万遍の笑みを浮かべて見せた。

すると、

「…………、そうだな…………俺、まだ諦めるには早すぎたよな。……サガミ、…………ありがとう。」

カイが、ほのかに笑みを浮かべると、サガミを抱き締めた。

サガミは驚きのあまり、身動きがとれない。

ほんの数秒間、サガミはカイの温もりを近くで感じた。

そして、カイはサガミから離れ、その場を立ち去つていった。

サガミにとつては、長い数秒間に感じられた。

サガミが宿に着くと、部屋の前にミキカが立っていた。

「ミキカさん、どうしたんですか？」

そのサガミの声に反応して、ミキカがそむきを振り向く。

「あなたに、話しておかなければならぬことがあるの……。」

ミキカの表情は重苦しいほど真剣だった。

サガミはそのミキカの様子に、ただ事ではないと察知しつつ、緊張しながらミキカを宿の部屋へと招き入れた。

部屋に入ると、ミキカは早速サガミに問う。

「レイイザーって、知ってる？」

そのミキカの質問に、サガミは頷いた。

「じゃあ、私がレイイザーの一員であることも？」

それにも、サガミは頷いた。

「わう……。それなら、話は早いわ……。」

ミキカは、ため息混じりに言った。

そして、ミキカは語り出す。

「レイイザーって、『殺し屋一味』ではね、依頼を受けて指令を出す幹部の人間と、実際にターゲットを仕留めるキラーの、二種類の分

担がある。幹部つていうのは、さつき倉庫で私と一緒にだつた男が
そななんだけど・・・。レイイザーが何故、裏社会で暗躍している
かと言つと、その殺しの方法が全て「暗殺」だからなの。「暗殺」
は、ターゲットを一度で確実に仕留めなければならないというリスク
と、それによつて存在が公に広まりにくいという利点がある。」

サガミは、ミキカが何故レイイザーについて事細やかに語つている
のか、不思議に思いつつも、耳を傾けていた。

「暗殺は内密に行われなければならないから、依頼主との接触やタ
ーゲットの確認には、気を使うの。まず、幹部の人間から私は茶封
筒を受け取つて、それをカイに送る。そして、その封筒の中に書か
れた待ち合わせ場所で、カイはターゲットの情報を幹部から受け取
る。そして、カイはターゲットを確実に仕留める。それが、暗殺ま
での流れなの。だから、私はターゲットも依頼主も、どんな人物な
のか知らない・・・。私が実行するはずの暗殺を、カイが代行し
ていたからね・・・。もちろん、カイも実際に仕事を受けてターゲ
ットを知らされるまでは、何の情報も得られないの・・・。」

ミキカが深呼吸した。

「でも、カイはつい最近レイイザーを抜けたの。」

サガミがハッとした表情になつた。

「幹部の人間は、レイイザーを抜けたカイを裏切り者として、私に
カイの殺害を命令してきたわ・・・。そして、カイにも最後の仕事
としてターゲットを与えていて・・・。」

ミキカが、言葉に詰まつた。

「さつき倉庫で一緒にいた男に、カイの仕事の依頼主とターゲットのことを、初めて聞かされたの・・・。正直、・・・愕然としたわ・・・。」

ミキカが、サガミの瞳を一直線に見つめた。

サガミは、さらに緊張感が高まるのを感じた。

「カイが最後に与えられた仕事の依頼主は「ロングシャドウ」。ターゲットは、「サガミ」・・・、つまり、あなたなの・・・。」

サガミは、息の止まるような心持ちだった。

「・・・・え・・・・？」

よつやく出たサガミの言葉は、その一文字だった。

ただ、信じられないといつも気持ちから、息の抜けるような一言が出ていたつてこと・・・？」

「じゃあ、・・・カイは・・・、私を殺すチャンスを、近くで窺っていたつてこと・・・？」

サガミが、目を泳がせながら震える声で言った。

「それは、違うと思うわ！もしカイがあなたを本当に殺すつもりがあつたら、それはすぐに実行されてたはず・・・。でも、何もせずにカイがあなたのそばにいるということは、カイはあなたを殺すつ

もりはないってことだと思つ・・・・・！」

ミキカの表情は、必死だつた。

「でも、もしこのままカイが依頼を無視し続けるとしたら、あなたはイレイザーの人間全てから命を狙われることになるわ・・・・。依頼の不履行はイレイザーの信頼を著しく侵害すること・・・・。裏社会では、イレイザーのターゲットにされた人間は、確実に消されると言わてるの・・・・。イレイザーの中で腕のたつたカイも、裏社会では「死神」とさえ噂されてたくらいで・・・・。とにかく、あなたに身の危険が迫っていることを、一刻も早く伝えなければと思つたの・・・・。」

サガミの顔が一気に青ざめた。

そして、突然身構える。

「じゃあ、ミキカさんも、私の命を奪おうとしてるの！？」

その、ひどく怯えた様子のサガミを見て、ミキカは、

「大丈夫！私はあなたの味方よ！初めから、私はイレイザーなんかに忠誠を誓つてないんだから！」

サガミをなだめるように、両手を挙げて言つた。

その言葉に、サガミはホッと息を吐いた。

「カイも、依頼を無視すればどうなるかを知つてるはずだから、たぶん、カイはあなたをイレイザーから護るつもりでいるんだと思う

わ。カイがもしそう考えているなら、私もあなたを護るから！安心して。」

ミキカのその言葉に、サガミは完全に安心することはできなかつた。
そして、夜が更けていった。
サガミは、ベッドに入つて大人しく眠りにつくことは、全くできなかつた。

No.17 気持ち（後書き）

こんには。作者のJOHNEYです。最近、更新が遅くて申し訳ありません。…。どうか、見放さず今後もお読み頂けたら幸いです（汗）

ミキカは、サガミのもとを去った後、カーザの部屋で床に就き、朝を迎えた。

まだ夜が明けきらない早朝に目が覚めたミキカは、部屋の窓から見える海を無意識に見つめていた。

すると、

「海がよく見えるだらう?」

カーザが、あくびをしながら起きて來た。

「ガキの頃、よく家族みんなで海に行つたの覚えてるか?」

そのカーザの言葉に、ミキカは首を横に振つた。

「そうだな……。まだ小さかったからな……。」

二人の間に、沈黙が生まれた。

「昨日は、『ごめん……。ちょっと、言い過ぎた……。』

ミキカが、海を見ながら言った。

カーザは、その言葉にこれといった返事はせず、ただ微笑んで見せた。

「「」のネックレス、ちゃんと大事に持つててくれたんだな。サガミちゃんから受け取ったよ。」

そう言って、カーザはポケットから星のネックレスを取り出した。

「それ、お母さんの形見だって言ってたから。いつカーザに返そつかと思ってたら、ちょうどあの子がカーザに会いたいって言って、私を訪ねて来たの。」

「そつか。でも厳密に言うと、これは母さんの形見というよりは、先祖の形見って言ったほうが、正しいかもしれないんだ。」

「え？ どういう意味・・・？」

ミキカが、カーザに一步近づいた。

「俺にも、正確なことは分からんんだけど・・・。」

そう言って、カーザは過去を語り始めた。

今からさかのぼること、およそ8年前のこと。

カーザとミキカが両親の死後、一人で身を寄せ合つて生活していた

頃のことだ。

イレイザーの人間に所在を掴まれ、ミキカだけが連れ戻されてしまい、カーザは困惑していた。

当時、世話になっていた診療所の医師が、カーザをかくまってくれたおかげで、イレイザーの人間から一先ず逃れることができた。

しかし、いつ見つかってもおかしくない状況にあった。

イレイザーの魔の手に怯え、診療所の片隅で震えていた時、幼い頃に母から受け取った星のネックレスがカーザの心の支えとなっていた。

カーザは震える手で、首から提げていたネックレスを、強く握り締めた。

すると、パキッという音と共に、星のモチーフになっているトップの部分が少しづれた。

カーザは壊してしまったと思い、慌てて直そうとした。

しかし、そのずれた隙間から何やら銀製の鍵らしきものと、小さく折り畳まれた赤茶けた紙が見えた。

その紙を取り出し、広げて見てみると、診療所のある町の名と、その下に簡単な地図が記されていた。

その地図には、小さく黒い点が一つある。

それは、診療所の近くにある砂浜を指しているようだつた。

カーザは、すぐにその砂浜へと走つた。

それは、亡き父母からのメッセージのような気がしたからだ。

そして、地図中に記された黒い点の位置を推測し、砂浜を掘り返した。

しばらく掘つていいくと、鍵のかかった木箱が出てきた。

その鍵穴にネックレスに隠されていた銀製の鍵を入れてみると、木箱の鍵は見事にあいた。

その木箱の中には、赤黒い液体の入つたビンが入つていた。

その液体を少し自分の服の裾に染み込ませると、カーザは再びそのビンを木箱の中にしまい、鍵をかけて同じ所に埋めなおした。

診療所に急いで戻つたカーザは、その液体の正体を調べ始めた。

顕微鏡で見てみても、それが何なのかがカーザには分からなかつた。

すると、世話になつてゐる診療所の医師が、

「カーザ、何を調べてゐるんだい？」

真剣に顕微鏡を覗き込むカーザを見て訊ねた。

「先生。これは、何だと思いますか？」

そう言つて、カーザは医師に顕微鏡を覗かせた。

すると、

「んー？・・・」、「これは・・・！」

医師が驚愕の声を上げた。

そして、おもむろに本棚をひっくり返すよつにして、一冊の書物を持ち出してきた。

「カーザ、これを見てみなさい。」

そう言つて、医師が差し出した本は、不死鳥研究に関する最新の文献だった。

「これは、何ですか？」

「これは、不死鳥の血液中細胞の図なんだ。最近出てきたこの本によつて、不死鳥の血液中の細胞について知られるよつになつたんだ。」

「

そう言つて、医師はカーザが覗いていた顕微鏡の倍率を上げた。

そして、

「もう一度、見てみなさい。これは、大発見かもしれないぞ・・・。」

「！」

カーザは医師にそう言われて、再び顕微鏡に目を向けて了。

「…………お…………同じだ…………」

カーザは息を呑んだ。

カーザが見つけてきた液体は、不死鳥の血液だつたのだ。

これは、世紀の大発見とも言えることだつた。

そんな出来事に興奮していた医師は、この血液をどこで見つけてきたのかをカーザには訊ねず、ただカーザと二人で研究に没頭し始めた。

しかし、研究は困難を極めた。毎日毎日研究をし続けたが、いつになつても、分かることは

「不死鳥の鮮血と不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血液とでは、持つ能力が違う」ということだけで、その具体的な違いを知ることができないでいた。

そんなある日、診療所に一人の細身で眼光の鋭い男が現れた。

その男は、見たところ年齢は30代の前半～後半といった感じだったが、左手に木製の杖を持つていた。

そして、診療所に入つてくるなり、いきなり拳銃を構えた。

「カーザっていう小僧を探している。お前か？」

その、心の無いしゃべり方の男は、銃口をカーザに向けた。

この男がレイイザーの手の者だと、「う」とは、間違いなさそうだった。

「おたくは誰だね? うちには、カーザなんていう子は・・・」

「バーンっ! 」といつ、一発の銃声が響いた。

カーザをかばいながら、男に近寄つて行つた医師が撃たれたのだ。

カーザの表情が青ざめる。

「貴様には、訊いていない。」

そう言つて、もつすでに床に落ち伏せている医師の背中垣掛けて、男はもう一発銃弾を放つた。

カーザの体が小刻みに震えだす。

「答える、小僧。お前がカーザか?」

その男の迫力に押されるように、カーザは頷いた。

「そうか。じゃあ、来い。」

そう言つて、男は震えるカーザの腕を引っ張つた。

しかし、カーザは頑固に動かさなかつた。

「死にたいか?」

カーザは思いつきり首を横に振った。

その時、男の足が床に置いてあつた本にぶつかった。

それは、不死鳥研究の文献だった。

すると男は、

「お前も、不死鳥に興味があるのか？」

笑み一つない顔で、カーザに訊ねた。

カーザは、その男の言葉に田代とく反応する。

「あなたも、不死鳥に興味があるんですか？」

その質問に対し、男は少し考えた後、近くにあつた椅子に腰掛けた。

「不死鳥の何を知っている？」

「それに答えれば、俺の安全と、妹の解放と安全を、約束してくれますか・・・？」

カーザは、震える声で言った。

すると、男は鼻で笑うと、

「小僧、何様のつもりだ？」

と言つて、銃口をカーザの額に当てた。

「きつと俺は……あなたが知らないことを知つています……！それでも、殺しますか……？」

そのカーザの言葉に、男は銃口をカーザの額から引いた。

「話せ。」

そう言われて、カーザは口を開く。

「单刀直入に言います。俺は、不死鳥の血液を持っています。」

すると、男の顔色が変わる。

「何だと！？嘘じやないだらうな！？」

男は、勢い良くカーザの胸倉を鷲掴んだ。

カーザの顔が苦痛に歪む。

「どこで手に入れた！？不死鳥に会つたのか！？」

男の、怒号のような激しい声が響いた。

カーザは、激しく首を横に振つた。

すると、男が突然、何かを思い出したように静まった。

「……まさか……。……小僧……、その血液はビンに入つてるんじゃないの……？」

男は、カーザの胸倉から手を離した。

カーザがむせ返る。

「小僧！ビンはどうだ！？」

その、明らかに先ほどまでの冷徹な様子とは打って変わって、熱くなっている男を見てカーザは、

「確かに、ビンに入つてました。でも、その在り処は言えません。」

どこか冷静な面持ちで応えた。

「何だと！」

男が再びカーザに掴みかかった。

「あなたにとつて、あのビンは大切な物なんですか？」

そのカーザの質問に、熱くなっていた男が口を滑らす。

「当たり前だ！あのビンに入っている血液で、俺は完全なる不老不死の体に・・・・・！！」

男が、ハツとした表情になり、言葉を止めた。

「・・・「完全なる不老不死」・・・?」

カーザがその言葉を復誦した。

男が突然大人しくなった。

「完全って・・・。もしかして、あなたは不完全な不老不死の体だということですか・・・?」

男は黙つて何も話さなくなつた。

これは、有利な立場に自分が立つたのだと、カーザは悟つた。

さらにカーザは、

「不死鳥の鮮血には、不老不死の能力が宿るとされてますが、あれは実は、鮮血を大量に浴びないと起こらない現象のようです。つまり、鮮血が少し体にかかりたり、触れたりするだけでは、不老不死にはならないということです。しかし、一説には鮮血に触れただけでも「不老」の能力が得られるという話もあります。」

暗記していた事を口にするかのように、ペラペラと早口でしゃべつた。

「あなたは、もしかして不老の体なんですか・・・?」

そのカーザの質問の後、一人の間には長い沈黙が生じた。

そして、しばらくすると、

「どうやら、お前はそこら辺に転がっている、低能な不死鳥研究家よりも頭が働くようだな。」

男が口元に微かな笑みを浮かべながら言った。

「お前の推測通り、俺は不死鳥の鮮血に触れた。今から何年前だつたか、ライクという国にある森の中で、血を垂れ流している不死鳥を偶然見つけた。そして、その鮮血を俺はビンに採取した。その時にたまたま鮮血が手についてしまい、俺は不完全な不老不死の体、つまり不老の体となつたわけだ。」

相変わらず冷たい様子の男の顔を見ながら、カーザは話を聞いた。

「初めは、自分が老いることのない体になつたと知つて喜んだ。だがな、それは間違いだつた。俺は確かに老いることはないが、けして死はないわけではない。見かけは当時のままで若々しいが、確實に死は近づいてきている。人より少し寿命が長くて、常に若い。俺はただそれだけなんだと知つて、愕然とした。だから、不死鳥から採取した血液に、この俺を完全なる不老不死の体にする作用がないかと、調べ始めた。だが、調べ始めて間もなくに、その血液が何者かに盗まれてしまったのさ。」

男の凍てついた瞳が、カーザをギロリと見らん。

「だがな、当時その血液の持つ能力を研究するように依頼した不死鳥研究家は、無能で使えない男だつた。もしあのまま血液が手元にあり続けて、あいつにずっと任せていたら、どちらにせよあのビンに入つた血液が俺を救うものなのかどうかを知ることは、できなかつただろう。だから、これは好都合だとも言えるのだろうな。」

男が、クツクツクツクツと、不気味な笑いを上げた。

「小僧、さつき俺に妹がどうのと言つたな。もし、妹を解放して欲しければ、ビンに入つた不死鳥の血液にどんな能力があるのか、調べ上げろ。」

「え・・・・・？」

カーザの表情が焦りの色に変わる。

「いいか、その間は貴様にビンは貸しておいてやろう。だがな、く
れぐれも間違つた研究結果を報告しないようにすることだ。もし、
偽りを伝えたり、報告もしないまま妹と逃亡でもしてみる。冷たい
海の底に沈めてやる。一人別々にな。」

そう言って、男は鋭い眼光でカーザを一睨みすると、椅子から立ち
上がつた。

「ちょっと、待つてくれ！俺一人で不死鳥を調査するなんて、無理
だ！」

そのカーザの言葉を聞いて男は、

「じゃあ、じつじよじよじやないか。調査期間は5年間。その間に有
力な研究結果が得られなかつたら、貴様も妹も死をもつて償う。そ
うしておけば、「無理」などと言わずに必死になつて調べ上げるだ
らう？ なあ、カーザ？」

カーザは拳を握り締め、唇を噛み締めた。

「ああ、そうだ。あともう一つ言つておけ。不死鳥の血液のこと
は他人には絶対に洩らすな。いいな。」

男は、再び杖をつきながら拳銃を片手に診療所を去つて行った。

その場には、すでに息絶えた医師と、歯を食いしばるカーザだけが
残された。

No.18 不老の男（後書き）

こんには。作者のJOHNEYです。更新大変遅くなりまして、
申し訳ありません（汗）

カーザの話を、ミキカは真剣な表情で聞いていた。

そして、

「そんなことがあつたなんて・・・じゃあ、研究に没頭するため
に、私にも所在が分からぬように、身を潜めたの・・・？」

ミキカが、カーザの顔を見て言った。

カーザは、静かに頷いた。

「本当は、研究結果が出るまでは、ミキカにもイレイザーの連中に
も、見つからないようにするつもりだったんだけど・・・」

「カイが見つけちゃったんでしょう？」

ミキカが微かな笑みとため息を混じらせながら言った。

その言葉にも、カーザは頷いて見せた。

「カイが突然、俺が身を潜めてたボロい小屋に現れて、ミキカが会
いたがつてるって言うもんだから、それは驚いたよ。ミキカの依頼
で俺を探してたつてことは、カイもイレイザーの人間なんだろうと
思つて、間違ひなく殺されると思つたからね・・・」

ミキカが小さな声で笑い出した。

一人の頭の中に、当時の記憶が甦つた。

「ミキカがあんたを探してるんだけど、会つてやってくれないかな？」

カーザが身を潜めていたボロ小屋に入つてくるなり、カイは万遍の笑みで言つた。

カーザは体が硬直した。

「お、お、お、お前は、誰だ！？」

その、明らかに動搖しているカーザの言葉に、

「俺は、ミキカの知り合いだよ。ミキカに、あんたを探してほしいつて頼まれてさ。」

相変わらず爽やかな笑顔でカイは応えた。

「まあ、いいから、とりあえず来てよ。」

そう言つて、カイは足を踏ん張らせているカーザの腕を掴んで、小

屋の外へと引きずり出した。

カーザは、このまま殺されるのだろうと想像し、表情が一気に青ざめた。

しかし、引きずり出された先に待っていたのは、死ではなく、妹のミキカだった。

「カーザ！」

そう一言叫んで、ミキカがカーザのもとへと駆け寄つて來た。

カーザは目を丸くしてそのミキカを見ている。

「カーザ、探したんだよ！私、てつきりカーザもイレイザーの人間に拘束されたんだと思って、心配してたんだから・・・！」

ミキカの瞳には微かに涙が浮かんでいた。

「…………」「ごめん……。」

カーザが呆然とした表情でミキカに言った。

二人から少し離れた所に立つてゐるカイを、カーザが横目でチラつと見た。

そのカーザが向ける目線に気が付いたミキカが、

「あ、彼は、カイっていうの。私に協力してくれてる人で、カーザのことを探すのも手伝ってくれたのよ。」

カイのほうを見ながら言った。

「協力してくれてるって、イレイザーが雇った奴なのか？もし、そうなら信用しないほうが身のためだぞ。」

「イレイザーに雇われてるというか・・・・・、私にもよく分からぬけど、私に力を貸してくれるって言うの。・・・・・で、彼が私の代わりに仕事をこなしてくれて、・・・・人殺しを強要されることから解放されて、正直、助かつてる・・・。」

ミキカが苦笑いを浮かべながら応えた。

「怪しい行動があつたり、下心がありそつたら、すぐに手を切つたほうがいいぞ。」

カーザが、カイに聞こえないように小さな声でミキカに言った。

それに、ミキカはただ複雑な笑顔で小さく頷いた。

「そろそろここを離れたほうがいいかもな。万が一イレイザーの人間に見つかったら厄介だし。」

カイが、自分から離れた所にいるミキカとカーザに呼び掛けた。

「そうね。」

ミキカがカイの声に応えた。

そして、「じゃあね」とカーザのもとをミキカが離れようとした時、

カーザはとつやにミキカを呼び止める。

「あ、そうだ、ミキカ！」

その声に、ミキカは立ち止まつた。

「これ、お前に預かつておいてほしいんだ。今は、俺の手元に置いておきたくないからさ。」

そう言つて、カーザは首からさげていた星のネックレスをはずし、ミキカに手渡した。

「どうしたの、これ？」

ミキカが不思議そうな表情で、カーザから受け取つたネックレスを見た。

「ああ、・・・・、母さんから貰つたんだ。」

そう言つた後、カーザはカイのもとに歩み寄つた。

「妹を、頼んだぞ。」

とても頼んでいるような表情ではない、むしろ疑るような眼差しでカイを見て、カーザは一言言つた。

カイは、万遍の笑みで頷いて見せた。

昔を思い返していたカーザとミキカのもとへ、浮かない表情のサガミが現れた。

「おはようござります。」

そう言って、部屋に入ってきたサガミの田の下にはクマがあつた。

「サガミちゃん、どうしたの？」

カーザが心配そうな表情で、サガミの様子を見て言った。

「父に会いにきました。」

サガミが田をこすりながら言った。

「いや、そういう訳なくて・・・。疲れてるみたいだけど、大丈夫？」

「はい。大丈夫です。」

空元気な笑顔を浮かべて、サガミは応えた。

そして、サガミはベッドで眠っている父親のもとに歩み寄った。

それに反応して、眠っていた父親が目を覚まし、一人は何気ない話をしている。

しばらくすると、部屋の戸をノックする音が響いた。

そして、ゆっくりと開いた戸の先にはダングがいた。

それを見たカーザの表情が一気に強張る。

表情が一変したカーザを見て、ミキカが開いた戸のほうを振り返る。

すると、ミキカの表情もまた一変し、強張った。

「カイの死体はどうした？海にでも投げて処分したのか？」

ダングが、寝覚めの良さそうな血色の良い表情で、カーザに訊ねた。

カーザはとっさに、

「あ、ああ。」

と、動搖した様子で答えた。

ダングの声に気が付いたサガミが、カーザたちのもとへ歩み寄る。

「あんた、何しに来たの？」

強気な態度のサガミにダングは、

「お前、どこかで見た顔だと思ってたら、カイが殺すはずだった女

だつたんだな。」

と、少しづつサガミの方へ近寄りながら、笑顔で言った。

すると、そのダングをミキカが制し、

「このは関係ないわ。」

と、心なしか震える声で言い、ダングをにらみ上げた。

すると、ダングはミキカの首を右手で鷲掴み、自らの方へ引き寄せた。

「使えねえ奴が、生意氣に意見するんじゃねえよ。」

そう言って、ダングはミキカを乱暴に投げ飛ばした。

「ミキカ！」

カーザが投げ飛ばされたミキカのもとへ駆け寄る。

「何？私を殺す氣？」

怯えていることを必死に隠そうとしているサガミの額には、汗が光っている。

「苦しみたくなれば、大人しくしてろ。」

そう言って、ダングは懐から拳銃を取り出し、サガミの額にその銃口を当てた。

「よせー・やめろつー。」

カーザが、すごい剣幕でダングに掴みかからうとした。

しかし、ダングはそれをヒラリとかわした。

カーザをかわした時に、ダングは自分が入ってきたドアの方に体が向いた。

すると、そこには、ダングにとつては信じ難い状況があった。

息が止まるほど驚きに、声が出せないでいるダングが、やつと一言を発する。

「・・・・・・・カイ・・・・・・・！？」

カイは、ダングの目の前で万遍の笑みを浮かべて立っていた。

「また会つたな。」

そつ言つて、カイはダングの方へとゆっくり歩み寄つてくる。

ダングの息が荒くなり、明らかに動搖を隠しきれていない。

「な、何で、・・・何で・・・、お前・・・・？」

「俺？幽霊。」

カイは、イタズラ小僧のような、おしゃらけた笑いを上げた。

「サガミは、俺の仲間なんだよ。だから俺の手では殺せない。もちろん、イレイザーの人間にも殺させない。な？ 分かつたら、さっさと帰つてくれよ。ここには病人もいるんだからさ。」

そう言つて、カイは硬直しているダングの背中を押しながら、出口へと促した。

すると、ダングがカイの左胸に一発の銃弾を撃ち込んだ。

銃声の後、カイの胸から煙が出た。

しかし、

「何で、分かんないかなあ？」

カイは、わざとらしく頭を抱えてみせた。

「お前、・・・・・まさか、不老不死なのか・・・！？」

ダングは皿を見開いてカイの顔を見つめた。

カイは特に返答はしなかつたが、否定もせずに、ただダングを部屋から押し出した。

そして、

「じゃあな。もう一度と俺の前に現れないでくれ。」

真剣な眼差しを笑顔で隠すような複雑な表情で、カイはダングに言

つた。

ダングは、何も応えることなく、無表情でその場を静かに離れていた。

No.19 不老不死の男（後書き）

こんにちは。作者のJOHNEYです。久しぶりに更新致しました。
今後もどうぞよろしくお願い致します。

部屋の戸を静かに閉めたカイが、拳を握り締めて棒立ちしているサガミに歩み寄った。

「眠そうだな。」

緊張感のないカイの言葉に、サガミはまだ大きなため息を吐き、その場にしゃがみこんだ。

そして、カイはミキカの方を振り返り、

「ミキカ、大丈夫か？ダングは、相変わらず乱暴だな。」

心配しているのか、分かりづら表情でミキカに言った。

「…………私、ちょっと出掛けてくれる。」

そう言って、ミキカは少しよろめきながら立ち上ると、部屋を出て行つた。

それを、慌ててカーザが追いかけた。

サガミが、ばつの悪そうな表情を浮かべて立ち上ると、父親が眠るベッドの方へ歩いていった。

「何だか様子がおかしかったようだけど、何かあつたのか？」

ベッドに横たわるサガミの父親がサガミに訊ねた。

サガミの父親は、大きな回復を果たしてから、さらに回復するまでに至つておらず、未だベッドから離れられない状況にあった。

「何でもないの。ちょっと色々言ひ合つてただけ。」

「何でもないなら、良いが・・・。サガミ、前にも言つたが、父さんに氣兼ねせずに自分のしたいことをして良いんだよ。」

「また、そういうつまんなじと言つんだから・・・。氣兼ねなんてしてないつてば。」

「父さんはきっと、ここまで回復するのが奇跡に近かつたんだろうと思つ。少しぐらいなら歩くこともできるようになつたしな。でも、やつぱり誰かの手を借りずには生活することができないというのも事実・・・。そうなると、サガミの手を煩わすことになつてしまつ。・・・・・・、父さんが、死ぬまで・・・。」

サガミと父親の間に、重い沈黙が漂つ。

「な、何言つてんの？・・・、もちろん、これからもずっと父さんの面倒は私がみるよ！当然でしょ？親子なんだから。」

父親は、そのサガミの言葉に微笑みは見せたものの、どこか複雑な胸中が見え隠れした様子で一つ、息を吐いた。

「・・・・・・、それは、辛いな・・・。」

「え？」

サガミには聞こえないほど小さな声で父親は呟いた。

それからじつまじめ、部屋の中に話し声は聞こえなくなった。

部屋を飛び出したミキカは、小走りでシオンの町を進んでいた。

カーザは、焦った様子でそれを追いかけている。

「おー、ミキカービー行く氣だよー。」

そのカーザの声に、ミキカは反応しない。

「ミキ力！」

カーザはミキカの肩を掴み、その足を止めた。

ミキカがその勢いでカーザの方に振り返る。

「さつき、カーザだつて見たでしょ」うへサガミわやんがレイザー

に狙われてるの…」

「…………、ダングが言つてた、カイが殺すはずだつた女つて
いのは、どういう意味なんだ……？」

真剣な表情のミキカを見て、カーザが疑問を投げ掛けた。

「ロングシャドウっていう組織から、サガミちゃんの暗殺依頼があつたの……。その任務を受けたのがカイで……。でも、カイはそれを実行しなかつた。だから、レイザーの全ての人間から、サガミちゃんは命を狙われてるの……！」

「…………、そういうことだつたのか……。」

「もうすでに、レイザーには所在を掴まれてるわ……。だから、サガミちゃんを逃がすしかない！」

「逃がすって、どうするつもりだよ！？」

再び歩き出さうとしたミキカを、カーザは引き止めた。

「とにかく、このシオンから遠ざけるしかないわ。シオンから出る手段は航路しかない……。それをレイザーに塞がれでもしたら、もう、逃げる場所がなくなっちゃうでしょ！？だから、すぐに船のチケットを取つて……！」

ミキカの声を遮るように、カーザが言葉を発する。

「ミキカ、何でそこまでするんだ……？冷たいようだけど、サガミちゃんは、俺たちにとつては出会つて間もない他人なんだぞ……。

？」

ミキカは、そのカーザの言葉に一瞬黙つた後、

「元はと言えば、私が蒼いてしまつた種だから……。それに、サガミちゃんと約束したのよ……。護るつて。……でも、一番は、・・・カイがサガミちゃんを護りつとしているから。だから、私もそうするの。」

落ち着いた様子で、カーザに応えると、一目散に船のチケット売り場へと走つていった。

しかし、チケット売り場の手前の細い路地から数人の男が現れ、そのミキカを路地へと引き込むのをカーザは目撃した。

カーザは、急いで駆け寄る。

しかし、

「女は預かつた。明日朝一番に不死鳥の血とその効果の研究結果を指定のホテルまで持つて來い。」

低い落ち着いた男の声が聞こえたと思った途端、カーザの意識は激痛と共に遠のいた。

沈黙していた部屋に現れたのは、頭から血を流したカーザだった。

「カーザ！？ 一体どうしたんだ！？ ミキカは一緒にやなかつたのか！？」

カイが、ふらつきながら部屋に入ってきたカーザのもとへと、一目散に駆け寄った。

そのカイの声を聞いたサガミも、父親のベッドから離れて現れた。

「ミ、ミキカがさらわれた！？・・・・、イレイザーの連中がやつたんだ・・・！ 明日の朝一番にホテルに来いつて・・・・・！」

歯を食いしばりながら、カーザは息を荒げた。

とても普通ではない様子に、サガミの父親も杖をつきながらベッドから起き上がってきた。

「さらわれた！？ イレイザーは何か要求してきたのか・・・？」

そのカイの問いに、カーザは黙り込んだ。

「カーザさん！何か、要求されたんですか！？」

長時間が経過したかのよつな、ほんの少しの沈黙の後、カーザが重い口を開く。

「…………、実は、……俺は不死鳥の血を持つてる……。

そのカーザの言葉に、カイもサガミも驚きの表情を浮かべた。

「もともとは、イレイザーのリーダーのリュウつていう男の物だつた。でも、色々あつて俺の手元に渡つたんだ……。」

そして、カーザは過去の出来事を順を追つてカイとサガミに語つた。

「じゃあ、その不死鳥の血が入つたビンと、ミキカを取引しようつてことか……？」

そのカイの言葉に、カーザは重々しく深く頭を下げた。

「それなら、明日の朝なんて言わずに、今からせつとその不死鳥の血を持つて、ミキカさんを連れ戻しに行きましょっ！」

「いや、それはできない……。」

カーザがサガミの言葉に、小さな声で応えた。

「…………、あくまでも、あつちの要求は不死鳥の血とその効果の研究結果なんだ……。ビンに入った不死鳥の血がもたらす効果の研究なんて、ほとんど進んでない……。そんな状態で行つたつて、ミキカも俺も命を奪われて、それまでだ……。」

うな垂れて、その場に座り込むカーザのもとへ、カイが歩み寄った。

「それなら、あっちの要求なんて無視すればいい。力ずくでミキカを取り返すんだ。」

カイが、カーザの肩に触れた。

しかし、カーザはそれを振り払う。

「そんなことできるわけねえだろ？！？生まれた時からイレイザーに苦しまれてる俺たちの、何が分かる！？不老不死の体を手に入れた幸せなお前なんかに、・・・・・助けられてたまるかよ！」

カーザは、瞳に涙を溜めながら、すごい剣幕で怒鳴った。

その様子に驚きを隠せないサガミとは打って変わって、カイはいたつて冷静な面持ちでいた。

「カーザさん、・・・それは、ちょっと、言ひすぎ・・・」

サガミが、二人の仲裁に入ろうとした瞬間、部屋の戸が勢い良く開け放たれた。

そして、戸の目の前に立つサガミ戸掛けで、何者かが銃弾を連射する。

あまりに急な出来事に、カイもカーザも助けに向かうことができなかつた。

サガミの生存は絶望的か・・・。

悪い予感がよぎるも、サガミの方をカイとカーザはゆっくりと振り返る。

しかし、そこにいたのは、呆然とした表情でしゃがみ込むサガミと、それに覆いかぶさる血まみれのサガミの父親の姿だった。

一瞬の間の後、サガミに銃弾を浴びせた人間は、一目散にその場を走り去つて行つた。

カイは、すぐにサガミのもとへと駆け寄る。

「サガミー！？」

カイの声に、サガミは反応しない。

しかし、その息は非常に荒い。

サガミに覆いかぶさつてゐる父親は、かすかに息をしてゐる。

そして、

「サ・・・、サガ・・・ミ・・・。」

そう言つて、父親はサガミの顔に震える手を差し伸べた。

それに、ようやく硬直していたサガミが反応する。

「お父さん……？」

サガミは、父親の真っ赤な手を強く握り締めた。

「…………よ…………かつた…………。…………、お前を…………、護…………
…………こと…………が…………で…………き…………た…………」

その言葉を最期に、父親は力なくうな垂れた。

「父ちゃん！？…………父さん！？」

サガミの悲痛な声が部屋に響き渡る。

その様子に強く拳を握り締めたカイが、部屋を疾風のゴトゴト走り去つた。

こんばんは。作者のJOHNEYです。物語も最後が迫って参りました。今後ともよろしくお願い致します。

サガミは、しばらく父親にしがみ付いたまま動かないでいた。

しかし、10分足らず経過すると、無表情のまま顔をゆっくりと上げ、おもむろに父親のむくろをベッドへと運んだ。

それを見ていたカーザが、サガミに声を掛ける。

「サガミちゃん・・・・・・?」

何と言つて良いのか分からず、腫れ物に触るような様子で、カーザがサガミを見た。

すると、サガミはカーザの方を一直線に見ると、

「カーザさんは、カイのことを誤解しています。」

まばたき一つせずに、そう言つた。

「誤解・・・?」

「カイは、不老不死であることを幸せだなんて思つてません。カイは、ずっと苦しみながら生きてきてるからです。誰かを失う辛さや、誰かを護れないもどかしさを一番知つてているのは、間違いなくカイだと、私は思います。だから、カーザさんは、カイを誤解します。

」

鋭くも純粹なサガミの瞳に、カーザは圧倒されていた。カーザは思

わざわづつむこた。

「父の！」とは、必ず迎えに来ます。それまで、よろしくお願ひします。」

そう言つて、サガミはカーザに深々と頭を下げ、その場を離れようとした。

それを、カーザがとつとて呼び止める。

「サガミちゃん、ビーハー・・・！？」

サガミは、その声に立ち止まりはしたものの、振り返らず、言葉も発さない。

「まさか、・・・一人でイレイザーの所に行くつもりか・・・？・・
・第一、イレイザーの居場所なんて分からぬだらう・・・！？」

サガミが、一步前に出た。

「やめるんだ！一人で奴らの所に殴りこんだといひうで、敵う相手じやない！返り討ちにあつて、それまでだ！命を無駄にするだけだ！」

しかし、サガミはそのカーザの言葉を背に、部屋を疎かに出て行った。

カーザのもとを離れ、サガミはシオンの町に出てきた。

しかし、カーザの言う通り、イレイザーの所在が分からぬ状況で、こうして町を放浪していても無意味な気がした。

それでも、じつとじつと見つめ、どうしてもできなかつた。

無意識なまま歩いていると、サガミは誰かとぶつかった。

「あ、・・・すいません・・・。」

サガミが反射的に言つた。

すると、

「サガミ・・・？」

それは、カイだった。

「さつきの奴、追いかけて出てきたけど、結局見失つちました・・・。
「めんな・・・。」

カイの、その悲しげな瞳をサガミは見上げた。

「私、……父さんの敵を討つ……。」

無表情のサガミが、齒くちづな低い声で言った。

「あむとカイは、

「……そつか……。分かった……。でも、一度気持ちを落ち着かせてからでも、遅くはないと思つた。まずは、親父さんをゆっくり眠らせてあげないか……？」

表情のないサガミの瞳を覗き込みながら、ゆづくつと言つた。

すると、サガミはハツとした表情を浮かべると、

「……せうだよね……。父さん、ゆづくつ……。」

こみ上げる涙で、サガミの言葉は途絶えた。

その後、カイとサガミはカーザの部屋へと戻り、サガミの父親のむくろをシオンの町の外れの岸壁に埋葬し、そこに花を供えた。

そして、その場にサガミだけを残して、カイとカーザは再びカーザの部屋へと戻つてきていた。

部屋に戻つてきてから、カイとカーザは終始無言のままだった。

しかし、しばらくしてカーザがため息の後、口を開く。

「…………ミキ力を助けるには、やつぱり、不死鳥の血の力をどうにか解明する他に手立てがない……。」

それは、カーザの独り言だつた。

ブツブツと同じようなことを呟き続けている。

「でも、これまで調べて分からなかつたことが、今突然解明できるわけがない……。でも、そうしないとミキ力は助からない……。」

「

おそらく、頭の中でも同じセリフを繰り返しているのだろう。

頭を掻きむしるカーザを見て、

「カーザ、もしかしたら、サガミが何か不死鳥の血についての情報を知つているかもしね。サガミは、少し前まで大規模な不死鳥研究団体の研究員をやつてたんだ。」

カイが落ち着いた声で言つた。

すると、

「不死鳥研究・・・？・・・・・・・・ロングシャドウ・・・。 そうか、どこかで聞いたことがあると思つてたんだ・・・！」

カーザが、目を見開いて閃きの表情を浮かべた。

「ただ、・・・、サガミが、すぐにショックから立ち直つて、協力できるような状態になれるかどうか・・・。」

すると、腕を組んで一つため息を吐いたカイの言葉の後に、まるでこだまのような速さで言葉が返つてくる。

「協力するよ。」

その声は、サガミの声だった。

「サガミ・・・！」

カイが、サガミの痛みを気に掛けるような複雑な表情で言った。

「私なら、もう大丈夫。不死鳥のことなら、私が力になるから。だって私、ミキカさんやカーザさんにも借りがあるでしょう。」

明らかに無理をしている笑顔のサガミが、さらに不自然な笑顔を作つた。

カイは、そんなサガミの様子に、居たたまれない気持ちになつた。

「それに、父さんだつて、きっとそうして誰かの力になつてゐる私を見たいと思ってるはずだから。私は、父さんのためにも立ち止まるわけにはいかないの！」

サガミの表情は力強かつた。

どんな修羅場を潜り抜けてきたような兵よりも、強靭で芯の通つた心の持ち主であることが窺えた。

サガミは、立ち直つたのではなく、父親の死を受け入れたのだ。

「こんな時に申し訳ないと思つ……。でも、時間がないんだ……。
協力してくれるかな……？」

切羽詰つた表情を浮かべたカーザが、サガミを懇願するような瞳で見た。

サガミは、迷うことなく、力強く一つ頷いた。

サガミの返事を受けたカーザは、すぐに隠していた不死鳥の血の入ったビンを取りに行き、戻ってきた。

そして手始めにサガミは、自分が知り得る全ての不死鳥の血に関する情報を話しだした。

「不死鳥の鮮血に不老不死の力が宿るというのは、もう一〇〇%そう言い切れるんだけど……。ただ、不死鳥の体外に出てからある程度の時間が経過した血が、持つ力っていうのは、説が二転三転しているのが事実……。」

サガミが、真剣な表情でカーザの顔を見た。

「不老不死の人間に「死」を『える』っていうのが、一番有力な説なんだよね？」

そのカーザの問いに、

「はい。でも、以前にもう一つ気になる説を聞いたことがあるんです。」

サガミが何か考える様子で答えた。

「気になる説つて……？」

「はい……。実は、「再生」の能力があるというものなんです。」

「再生……？」

カーザが身を乗り出した。

サガミが、小さく頷く。

「その意味は全く分からんんですけど、他の説とはどこか違う感じがして……」

二人の間に、軽い沈黙があつた。

そして、

「…………、どんな説があつたって、結局実際にそれを確かめてみないことには、確証が得られない……。それに、不死鳥の血をどうするとその効果が現れるのかだって、分からん……。飲むのか？触れるのか？浴びるのか……？」

カーザが、頭を抱えて再び独り言のように呟いた。

すると、ずっと二人の傍らで窓の外を眺めていたカイが口を開く。

「確かめてみよっか？」

そのカイの言葉に、サガミもカーザも畳然とした。

「は？」

カーザが氣の抜けた声を出した。

「俺は完全に不老不死なわけだし、その不死鳥の血が持つ力が何なのか、確かめられるだろ？」

カイは、いたつて冷静に、しかも微笑んで言った。

「何言つてんの！？不死鳥の血には、もしかしたら「死」の力があるかもしれないんだよ！」

サガミが、怒りをあらわにして怒鳴った。

しかし、

「でも、時間がないんだ。やるしかないよ。」

カイは、二人の不意をつくかのような速さで不死鳥の血が入ったビンを取ると、その中の液体を一口飲み込んだ。

「カイ！？」

カイのあまりに突然の行動に、サガミとカーザはただ叫んだ。

ゴクリと喉を鳴らして液体を飲み込んだカイは、一瞬静止した後、

「うつ！？」

低い「めき声を上げた。

「カイ！？」

サガミが、とつさに駆け寄る。

「ま・・・まづい・・・。」

低い声でそう言つと、カイは激しくむせ返つた。

サガミは、そんなカイを見て脱力した。

No.21 不死鳥の血（後書き）

ここにちは。作者のJOHNEYです。
も、どうぞよろしくお願い致します。

同時連載中の「時を刻む木」

「なんか、特に変化はないけど、飲むものじゃなかつたのかな？」

カイが、少ししかめた表情で言った。

「何で、こんな無茶するの！？ 万が一のことがあつたら、どうするつもりだつたの！？」

脱力していたサガミが、カイに掴みかかるような勢いで怒鳴つた。

すると、カイはそのサガミの言葉に、ただ口元に笑みを浮かべて応えた。

結局、不死鳥の血にどんな力があるのかは、はつきりとした答えが出ず、振り出しに戻つたような状況になつてしまつた。

そうしている間に、夜明けはすぐそこまで来ていた。

カーザとサガミが、ああでもないこりでもないと論争している傍らで、カイは再び窓の外を眺め始めた。

サガミには、先ほどの行動を無茶だと言われたが、カイにとつては

そうではなかつた。

むしろ、一抹の希望さえ抱いていた。

「死」というものに無縁になつてしまつたカイにとつて、唯一の「死」への道しるべとなる可能性を秘めていたからだ。

しかし、それは叶わなかつた。

カイは絶望に触れたような気さえしていた。

不死鳥がカイに与えた呪いは、残酷なほど根強いものだつたのだ。

カイは、小さく一つ、息を吐いた。

そして、夜が明け、新たな朝を迎えた。

夜通し不死鳥研究の文献を読みあさり、論争していたサガミとカーザだつたが、結局有力な答えは出ず、約束の朝を迎えてしまつた。

うつむいたまま、カーザは不死鳥の血が入ったビンを手に取った。

そして、三人は暗黙のまま部屋を出て、指定されたホテルへと向かつた。

ホテルのロビーに入ると、すぐに男が三人のもとへと歩み寄つて来た。

そして、三人を最上階の部屋へと案内した。

そこは、フロアの三分の一程を占める広さのスイートルームだった。

三人が部屋に入るとすぐに、立派な木製の椅子にこちらに背を向けて腰掛けた男と、その傍らで腕を組んで立つ、ダングの姿が目に入った。

そして、

「ミキカ！」

ダングの横には、後ろ手に縛られたミキカの姿があつた。

それに思わず駆け寄るうとしたカーザを、三人を部屋に案内した男が制止した。

ダングが男に部屋から出て行くように田で合図すると、男は素直に部屋から出て行つた。

「遅かつたな。待ちくたびれたぞ。」

椅子に腰掛けている男が、振り向きざまに言った。

そして、じぢらを向いた男を見て、カイが明らかに動搖の色を見せ
る。

「せつせと、そのビンをリュウさんに渡せ。」

ダングが、カーザに歩み寄つた。

そして、

「ああ、そうだ。」

カーザの横にいるカイを横目に見て、ダングが何かを思い立つたよ
うな表情になつた。

「リュウさん、実はこいつ、不老不死なんですよ。生意氣にも。」

ダングが、カイを指差した。

すると、

「不老不死だと? 小僧、貴様どこかで見た覚えがあるな。」

イレイザーのリーダー、リュウが、目を細めてカイを見て言った。

カイの瞳が鋭くなる。

「覚えてるのか・・・? 光栄だね。あんたと俺が会ったのは、

70

年以上も前のことだけだな・・・。」

カイが、力の入った表情で言った。

サガミとカーザは、二人のやりとりを不思議そうな表情で見つめている。

「リュウさん、一体どうしたことですか・・・？」

ダングも、理解しきれない様子で、リュウに訊ねた。

しかし、その問いにリュウは答えず、少し考え込んだ後に、クスクスと笑い出した。

「じつかり思い出したみたいだな。」

不気味に笑うリュウに、カイが微かな笑みを浮かべた挑戦的な表情で言った。

「エイミは、さぞかしお前を怨んでるだろ?」

リュウは、嫌味な笑いを上げた。

そう、リュウはカイがかつて愛したエイミの夫だった男。

つまり、エイミを殺した男。

エイミを苦しめていた男。

カイが強く両拳を握り締めた。

「まあ、そんなことはどうでもいい。カーザ、不死鳥の血には、どんな力があるか分かつたんだろうな？」

リュウが、杖を片手に立ち上がった。

そして、その若々しい容貌とは似つかわしくないほど危うい足取りで、カーザに歩み寄つて来た。

カーザは息を呑む。

「！」この不死鳥の血には、・・・「再生」の能力があります・・・。

何も解説できていないにも関わらず、カーザは苦し紛れにサガミから聞いた新説を口にした。

「再生？つまりどういう力だ？」

リュウも、その新説は初耳だった様子で、興味津々に聞き返してきました。

一度、小さく深呼吸してから、カーザは語り出した。

それを、不安そうな瞳のミキカが見つめる。

「再生とはつまり、悪化・老弱した組織を組み立てなおす力のことと言います。治癒とも言い表せますが、それ以上の能力があると思われます。あなたのように、完全な不老不死の体ではない者がこれを摂取すれば、老弱の進んでしまった部分を再生し、完全なる不老

不死の体を手に入れられる結果を得られるでしょう。」

そのカーザの説明は、とても苦し紛れにでっち上げた研究結果とは思えないほど説得力があった。

当然、リュウもそれを信じている様子になり、

「なるほど。よくそこまで調べ上げたな。」

と、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

少しの沈黙が漂つた後、リュウは突然カーザの手からビンを奪い取ると、その中身を一滴残らず飲み干した。

緊張したような面持ちのカーザと、真剣な表情のカイとサガミは、手に汗を握った。

ミキカも、不安をより一層大きくしたような表情で、状況を見守っている。

そして、

「リュウさん！？」

リュウは、言葉を発さないまま、その場に力なく倒れこんだ。

そして、小さく唸り声を上げている。

予想外の展開に、カーザとサガミが顔を見合せた。

「ど、どうしたことなの・・・？」

ミキカが叫んだ。

「貴様ら、リュウさんに一体何をしたー？」

ダングが、恐ろしいほどに剣幕でカーザに掴みかかった。

カーザは予想していたよりも良い方向にことが運んで嬉しい反面、怒り狂ったダングの逆鱗に触れたような状況に、複雑な表情を浮かべた。

そんな中途半端な顔をしているダングを勢いよく投げ飛ばし、ダングはミキカを羽交い絞めにした。

「お前ら全員殺す・・・まずはミキカからだ。」

そう言って、ダングは短刀を懐から取り出し、その刃先をミキカの左胸に向かって振り下ろした。

しかし、真っ先にカイが駆け寄り、その短刀の刃を握り締めてそれを阻止した。

ダングが血走った目でカイをにらみ付ける。

「化け物め・・・邪魔立てするな！」

カイは、怒鳴りつけてきたダングに、一発強烈なパンチをお見舞いし、ミキカをその手から解放した。

「カイ！」

ミキカが肩を震わせながらカイの背後に隠れた。

「どけ！カイ！」

カイに殴り飛ばされよろめいた先に置いてあつた銃を構えたダングが、叫んだ。

「お前には、撃つだけ無駄なのは分かつてんだよ…」

そう言つて、ダングがジリジリとカイとミキカの方へと歩み寄つてくる。

そして、

「あるいは、腕を撃ち落すべしのことはできたりするのか…？」

カイの至近距離に歩み寄つたダングが、銃口をカイの左腕に押し当てた。

冷静な面持ちのカイと、荒い表情のダングがにらみ合つ。

そして、銃声は一発、部屋に響いた。

勢いで、カイは後ろによろめく。

「ちつ…」

ダングは舌を鳴らして、その手に持つ銃の銃口をミキ力に向けた。

しかし、その手をカイが蹴り上げ、銃は遠くへ飛んでいった。

「この野郎！」

完全に頭に血が上ったダングが、カイに殴りかかってきた。

その間に、

「ミキ力！早く離れる！」

カイが、しゃがみ込んでいるミキ力に叫んだ。

そして、ミキ力は大きく頷くと、サガミとカーザのもとへと必死に走つていった。

「ミキカ！」

ダングに投げ飛ばされた時にぶつけて、顔にアザのできたカーザが、震える声で叫んだ。

「良かった・・・ミキカさん、無事で本当に良かった・・・！」

サガミが、無傷のミキカを見て、胸を撫で下ろした。

三人は、不老不死のカイがダングにやられる可能性をゼロとみて、完全に安心しきっている。

しかし、カイはダングに苦戦している様子が見られる。

お互の無事を確かめ合い、ホツとしているカーザとミキカを尻目に、サガミはカイの様子を見つめていた。

そして、

「カイ・・・？」

サガミは、カイの様子がおかしいことに気がつく。

殴りかかってくるダングに応戦する際、カイは右手しか使ってないのだ。

しかも、使っていない左腕は、力なくぶら下がっている。

大量の出血も見られる。

先ほどダングに銃で撃たれたのは、左腕だった。

「まさか・・・・！」

サガミは憤ざめた表情で、カーザのもとへ駆け寄った。

「カーザさん！」

サガミの必死な様子に、カーザとミキカの表情が引き締まる。

「もしかしたら、・・・カイは、もう、不老不死の体じゃないのか
も・・・・！」

そのサガミの言葉に、カーザとミキカは呆然とする。

「ど、どういう意味・・・？」

カーザが複雑な表情で訊ねた。

「だって、カイは銃で頭を撃たれても傷一つ残らないで、しかも血
だって一滴たりとも流さなかつたでしょう！？なのに、・・・・！」

そう言って、サガミは殴り合うカイとダングの方を見た。

それに合わせて、カーザとミキカもそちらを向く。

そして、カーザは目を見開き、

「…………再生…………？」

呟いた。

「サガミちゃん、もしかしたら、「再生」の力っていうのは……、正しい答えだつたのかもしれない…………。」

カーザが、倒れているリュウの方を見た。

サガミとキカが、真剣な表情でカーザの言葉に耳を傾ける。

「…………この、リュウって男は、「不完全な不老不死」。つまり、見た目としては老けることはなく、人より「死」というものから離れているけど、遠い未来には確実に死がやつてくる体。一方、カイは「完全なる不老不死」。そのカイがあのビンに入っていた不死鳥の血を飲んでも、表面的には何も起こらなかつた。でも、リュウには恐ろしいほど明確に効果が表れたように見える。」

カーザは、カイの方を見た。

「俺が思うに、「不老不死」っていうのは、「停止」つてことなんじゃないかな…………？」

「停止…………？」

サガミが真剣な眼差しをカーザに向けた。

「そりゃ。つまり、老いる時間と死へのリリジットを停止させるという事。」

「じゃあ、「再生」っていうのは、・・・」

サガミが大きく目を見開く。

「停止していたものを、再び動かし始める力ってことになるのかも・・・。」

カーザが、サガミとミキカの方を振り返った。

「不完全な体で、リュウはここまで生きてしまった。だからきっと、その付けがこうして回つて来たんだよ。そして、カイは完全に停止していたものが再生された。だから、カイは、ああして普通にしているんじゃないかな・・・？」

そうして、「不老不死」というものに一つの答えが出ようとしている間にも、カイとダングの殴り合いは続いていた。

息を切らせたダングが、カイを突き飛ばし、

「ちょっと、一服させろよ。」

ポケットから出したタバコに火をつけた。

カイも、大人しく突き飛ばされた先で、静止した。

ダングは、煙を口からフウッと吐くと、

「カイ。俺はな、お前に初めて会つたときから、お前のことが嫌いだつた。」

口元に微かな笑みを浮かべながら言つた。

「知つてたよ。」

カイが、無表情で答えた。

「じゃあ、何でだか分かるか？」

そのダングの言葉には、カイは一度首をかしげた後、

「俺が、あんたより少し背が高いからか？」

とぼけた表情で答えた。

「てめえ、バカにしてんのか！？」

ダングは、カイに向かつて吸っていたタバコを投げつけた。

「・・・お前が、ミキカのそばにいたからだ。」

ダングは、すぐに落ち着いた表情を浮かべて言った。

カイは、その言葉に少しハツとした表情になる。

そして、

「俺は、お前なんかにミキ力を渡すつもりはない。」

ダングが、一步カイに歩み寄った。

「ミキ力をお前に渡すくらいうなら、俺のこの手で殺して、ミキ力を永遠のものにする。」

そのダングの言葉を聞いた瞬間、カイは突然的にダングを一発殴り飛ばした。

そして、よりめいたダングの胸倉を掴み、自分のほうへとダングを引き寄せた。

「そんなことをせるかよ。ばっか。」

カイは、ダングの怒りをかうつな憎たらしい表情で言った。

案の定、ダングは逆上してカイに強烈なパンチを打ち込み、倒れたカイに馬乗りになつて何度も何度も殴り続けた。

しかし、ダングは何度か殴り続けた後、突然その手を止めた。

「どうせ、・・・渾身の一撃をくらわせたところで、お前は死なないんだろ?」

そのダングの言葉に、カイが口の中に溜まつた血を横に吐き出し、

「あんた、本当にバカだな。」

と、自分の上に馬乗りになつているダングを見上げて言った。

「何つー?」

ダングが、カイを殴るうといつ姿勢になる。

「気付いてないみたいだから、言つたが、俺、もう不老不死じゃないから。」

その、カイの言葉に、ダングは一瞬固まつた。

「何を言つて出すかと思えば・・・。そんな言葉に騙されねえよ。」

そう言つて、ダングはカイの上からどいた。

カイはゆつくりとしたモーションで立ち上がつた。

そして、

「疑り深いねえ。でも、本當だぜ。不老不死の体だった時は、銃で撃たれようが剣で斬り付けられようが、血も出なかつたし、負つた傷なんて一瞬で完治してた。でも、今の俺を見てみなよ。」

カイは、微笑みを浮かべながら自分の血を手でふき取つた。

「こんな大量出血して、さっき撃たれた腕だって動きやしない。意識も朦朧としてきて、今にも倒れそうだ。俺は、100年ぶりに、この生傷の感触を味わってるんだぜ。」

カイは、どこか楽しそうにしている。

ダングは、そのカイのふぞけた様子に、少しきり立つ。

そして、フラついているカイの首を掴み、勢い良くカイを壁に押し付けた。

カイの表情が歪む。

「じゃあ、確かめてみようじゃないか。お前が本当に不老不死じゃないのかを。」

そう言って、ダングは近くに転がっていた短刀を手に取った。

短刀の刃先が自分の顔に向いていても、カイの表情に纏りはない。

むしろ、何か悟りを得たような落ち着いた表情にさえ見える。

しかし、それは明らかにカイの危機的状況であることは、言つまでもない。

「あと、もう一つ、俺がお前を嫌いな理由を思い出したな。」

ダングが、不敵な笑みを浮かべながら言った。

カイが、訊ね返すような表情を浮かべる。

「お前のその、落ち着き払つた表情が、じつもイライラするんだよ。

「

カイは、そのダングの言葉にフツと笑いを一つもりすと、

「落ち着いて当然だろ？ だてに100年以上生きてないよ。ダング、四の五の言つてないで、さつさと殺れば？」

呆れたような、何ともダングをバカにしたような表情を浮かべて言った。

そのおかげで、ダングの怒りは最高潮に達する。

カイの首を掴んでいる手に、さらに力が入る。

「いのやうおつ！ ！」

ダングが怒鳴り声を上げ、振り上げた短刀をカイの顔に突きたてた瞬間、部屋に突如一発の銃声が響く。

そして、次の瞬間にはダングの苦しみの声が部屋に響いた。

カイは、田の前で悶えているダングを畳然とした表情で見つめた。

そして、そこから少し離れた所で、ドサッといつ音がした。

カイが、そちらを振り向くと、そこには震える手で銃を握り締め、その場に座り込むサガミの姿があった。

「サガミ・・・？」

カイは、すぐにサガミのもとへと駆け寄った。

サガミの後ろでは、呆然とした様子のミキカとカーザがいた。

二人も突然の展開に、驚きを隠せない様子だ。

「サガミ？」

カイは、サガミのもとへ駆け寄ると、すぐに銃を持つサガミの手を握り締めた。

すると、サガミが我に返ったように、カイの目を見つめた。

そのサガミの瞳は少し潤み、唇も小刻みに震えていた。

「わ、・・・私・・・・・擊つちゃった。」

サガミが、複雑な笑みを口元に浮かべながら言った。

「カイ・・・・・・・これって、・・・・仇を討つことになるのかな・・・・？」

カイは、静かにサガミの言葉に耳を傾けていた。

「・・・・・・・私、カイが死んじゃうと思って・・・・・カイが、いなくなつちゃうと思って・・・・」

サガミは、涙をこらえながら震える声で言った。

すると、カイの表情が突然綻び、

「ありがとう。」

咳くような声でサガミに囁くと、おもむろにダングのもとへと歩み寄つた。

カイは、ダングに短刀を向けられた時、むしろ、左腕に銃を向けられた時から、「死」への希望をみていた。

不老不死の体の時には叶わなかつた「死」というものに、ようやく巡り合えると、内心ホッとしていたからだ。

しかし、それは浅はかな思いだったのだと、カイは今気がついた。

「不老不死」という呪いから解き放たれた今こそが、カイにとつての人生の始まりなのだ。

これまで苦しみ抜いたからこそ、「生きる」必要があるのだ。

カイは、そう悟つた。

そして、自らに死を導こうとしていたカイを、サガミが、言わば「生きさせた」。

つまり、カイの浅はかな思いなど、純粹で勇ましく真つ直ぐなサガミには到底敵わないのだ。

右手を一発の銃弾に撃ち抜かれたダングは、つめき声を上げながら悶えていた。

「あの、アマ……許さねえ……！」

しかし、ダングの右手はすでに言つ事をきかなくなつていた。

「ダング、あんたの右手はもう再起不能だよ。そんな完全に撃ち抜かれてたら、日常生活にだつて支障をきたすだらうしね。ましてや、殺し屋なんて続けられないだらう。」

カイは、地面に落ち伏せているダングの目の前にしゃがんだ。

「それに、肝心のイレイザーのリーダーは、もう寝たきり老人。死を待つのみつてかんじだ……。そんな奴に付いて来る奴もいないだろうし、あんたがまとめ上げようとしても、たかが知れてる。イレイザーは、自然消滅が先の山だな……。」

そして、

「ダング、負けたんだよ。あんたも、イレイザーも……。」

複雑な表情のカイの言葉を聞いて、ダングは音がするほど歯を食いしばつてはいたものの、その場で脱力して静止した。

無事、ミキカを取り戻し、カイ達はホテルからカーザの部屋に戻つてきた。

しばらくしてからサガミは、独りシオンの港へと出て行つた。

部屋には、カイとカーザとミキカの三人になつた。

「助けてくれて、ありがとう。」

ミキカのその一言の後、部屋の中には会話が一つも生まれずにいた。

そして、しばらくしてからカイが口を開く。

「……イレイザーがこの先壊滅したとしても、俺やイレイザーの人間全てが犯した罪が消えるわけじゃない……。俺は、不老不死の体で、『死』というものをどこか軽く考え過ぎていたのかも知れない……。今こうして生きているということが、どんなに掛け替えのないことなのかつてことに、気付いてなかつたんだ……。」

真剣な表情で、カイは語つた。

すると、

「…………実は、サガミちゃんに「カイを誤解してる」って怒られたよ……。俺は、お前が不老不死であることを苦しみと思っているとは、思ってなくてさ……。悪かったよ……、「ごめん……。」

カーザがカイに深々と頭を下げた。

カイは、ただ、どこか寂しげな表情で、そのカーザの頭を上げさせた。

そして、少しの沈黙の後、

「これまで犯してきた数々の罪を償いながら、しょく罪に生きるのが、これから俺の「生きる」意味になる……。もちろん……。」

カイは黙り込んだ。

その言葉を聞いて、ミキカがすぐに口を開く。

「カイ……。」

悲しげな瞳のカイが、ミキカの声に反応した。

「ずっと……、いつ言おうかって、思ってて……。カイから私の曾祖母の話を聞いた時に、一つ思い出したことがあったの。でも、伝える機会を見失っちゃって……。」

カイもカーザも、不思議そつこニキカを見つめた。

「以前にね、私の祖母、つまりルミの書いた日記を見たことがあった。その中で、すごく印象的だったところがあつて……。」

ミキカは、日記に記されていたことを少しづつ思い出ししながら語った。

月×日

昨日の夜、幼い頃の夢を見た。

母がまだ生きている頃の夢だ。

当時、私はまだ3歳程で、記憶としてはとても曖昧なものだが、根強い思い出が残っている。

父は、お世辞にも良い父親であったとは言えない人だった。

母をいつも泣かせていた。

しかしある日、不思議な青年と母は近所の林で落ち合ひになつた。

その青年は、見た目の若さからは想像できないほど落ち着いた様子で、母は彼に好意を持っていた。

私も、彼の優しさや暖かさに触れるにつれて、彼が私の父親だったらどんなに幸せだらうとさえ感じていた。

彼に出会つてからの母は、驚くほど変化があり、笑顔が増え、将来への希望などなかつただらう時とは比べものにならないほど、明日への希望に満ち溢れていた。

そんなある日、母は私にこいつ漏らしたのだ。

「今とこいつ幸せな時が常に最高の時で、それが明日への希望に繋がつてゐる。これ以上の幸せは、きっとないだらう。今が幸せであり過ぎるから。」

その言葉は、私の記憶に根強く残つている。

昨日の夢の中でも、母は満弁の笑みで私にそつ、語りかけてきた。

あの不思議な青年が、どうか今、幸せであつますよ。」

それは、カイにとつて思わぬ知らせだった。

ルミが生前、そのような日記を残していたとは、カイにとつては意外な事実だった。

「ちゃんと全て覚えたわけじゃないから、多少違うところがあるかも知れないけど、少なくとも、日記に書かれた「不思議な青年」っていうのは、カイのことで、私の曾祖母や祖母は、カイのことを怨んだりしていなってことは、私にも分かるわ・・・。」

カイは、呆然としている。

「カイ、あなたは初めから償う必要なんてなかつたのよ・・・むしろ、あなたは感謝され、・・・愛されていたのよ。」

放心状態のカイの肩に、ミキカが触れた。

「カイ、一人が願っているのは、あなたが苦しむことじゃない。幸せである」とよ。」

ミキカは、真っ直ぐカイの瞳を見て言った。

すると、表情のないカイの瞳から、一粒の涙がこぼれ落ちた。

サガミは、シオンの港から大海原を見つめていた。

イレイザーの任務不履行によって、ロングシャドウは一先ず手を引き、サガミを襲う輩は消えた。

サガミはようやく、静かな気持ちでシオンに立つことができたような気がしていた。

しばらく経つて、シオンの港に独り佇むサガミの横に、静かにカイが現われた。

そのカイの表情は、どこか柔らかで、ここ最近の沈んだ様子のカイとは、どこか違っていた。

「カイ、諦めなくて良かったね。」

そのサガミの言葉に、カイが不思議そうな表情を浮かべる。

「ミキカさんを救う」と。

するとカイは、一息を吐いた。

「結局、俺はミキカを救えたのかな・・・？」

「何言つてんの？ミキカさんは、イレイザーフていうしがらみから解放されて、唯一の肉親であるカーザさんと、何からも怯えることなく暮らしてこゝ」ことが、できるようになつたんだよ！それは、幸せなことだよ！」

その、サガミの言葉に、カイは一瞬の間の後、笑い出した。

サガミも、何故かそれにつられて小さな笑いがこみ上げた。

「やつぱり、サガミには敵わないな。」

そのカイの呟く声は、サガミには聞こえなかつた。

「私ね、明日、シオンを出ようと思つんだ。それで、カイオウ大陸に渡つて、ライク国森に向かつつもり。」

そう言つて、サガミはポケットから紅い羽を取り出した。

「そつか。」

「うん。それで、今度は不死鳥の羽じゃなくて、本物の不死鳥をこの田で見るんだ！」

「そつか。」

カイの表情が優しい笑顔に変わった。

すると、次の瞬間、サガミの手から羽が突風に乗つて空高く舞い上
がつた。

「あ！！」

二人の声が合わさり、二人が同時に上を見上げた瞬間、そこには紅
の美しい羽を広げて飛ぶ、神秘の鳥がいた。

まるで、ここで解かれた一つの呪いを拾いにきたかのようだ。

ここにちは。作者のJOHNEYEです。ついで完結しました！全24話、至らない点が多くあつたかと思いますが、ここまで見捨てずにしてくださつた方々に、感謝の一言です。これからも、どうぞよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8508a/>

THE ENDS OF THE LIFE

2011年1月19日21時19分発行